
THE TEAM!

緒例

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE TEAM！

【Nコード】

N3035D

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

現役高校生の篠原快の家は掃除屋「TEAM」を営んでいる。そして快自身も現役バスターとして活躍していた。広い豪邸にクラスメートと一緒に住み、ともに犯罪組織を壊滅。その名声は世間を大きく揺らしていた。しかし、そんなある日、自分の父であり、社長である篠原義臣から重大な任務が言い渡された……

プロローグ

この世の中には「掃除屋」という職種が存在する。

警察でも解決できない犯罪者を取り締まるのが仕事であり、世の中の救世主的存在である。

そんな彼らのことを世間では「バスター」と呼ぶ。

そして、最近新聞の一面を飾る少年バスターが、今宵も裏世界に出向くのだ。

深夜、一人の少年がとある会社に侵入した。

防犯システムが普段は作動しているが、

今宵ばかりはそうはいかない。

システムそのものがとくに破壊されていたからだ。

しかし、それ以上にこの会社の社長は万全策を布いていた。

他所から多数の掃除屋を雇っていたからだ。

世間で言われている、「プロの戦闘集団」が自分の身を守ってくれる訳である。

だからこそ社長は自分の命の保障はされていると高をくくっていた。

だが、掃除屋には掃除屋のレベルの違いというものがもちろん存在する。

特に「TEAM」を敵に回してしまったことがそもそもの間違いなのであった……

「ガキが！ 死ね！」

派手に発砲される銃弾。

サイレンサー付きと言えども、銃弾の数には変わりはない。
しかし、少年はたじろぎもせず銃弾をかわして反撃する。

「うわっ！」

「うがっ！」

気がつけば掃除屋集団は壊滅状態に追いやられていた。

「なっ！ お前達！ 何してるんだ！ たかがガキ一匹に！」

「おいおい、おっさん、掃除屋といつてもその程度の奴らじゃ、
うちとまともにやりあえるわけがないだろう？」

全身黒尽くめの少年が社長の前に立つ。髪の色も黒。

サングラスをかけていて目の色は見えないが、その瞳も黒だ。
その分だけ白い肌が際立つっている。そして細い。

まだあどけなさが残る十五歳の少年は、

小太りの中年社長のもとに詰め寄っていく。

「三人の少女を暴行した罪でおまえの始末を付けに来た。

一歩でも動けばお前の命をもらっ」

静かに少年は告げる。

自分が雇った掃除屋とは比べ物にならない覇気が襲ってくる。

「ゆ、許してくれ！」

「許す？ そんな調子のいいこと・・・」

少年は近くにあった机に目をやると、

「あるわけねえだろ」

机を蹴り飛ばし粉碎する。

もはや本当に自分の命はないと社長は悟った。

プロローグ（後書き）

「現代アクションファンタジー」という感じでしょうか。ぜひ読んでみてください。感想をいただけると、すごく喜びます。

プロローグ2

「すぐに警察が来る。おまえはとつと自首しろ。

俺はこいつらの始末をつけねえといけないからな」

すでに戦意すらそがれている掃除屋たちに少年は近づいた。そして落ちていた銃を手に取り銃口を一人の男に向ける。その男は間違いなくこの掃除屋のリーダー格だった。

「お前等、『ブラット』のこの雇われものか？」

中年の社長以上の殺気を放って少年は尋ねると、

「いや、違う」

リーダー格の男はそれだけ言うのが精一杯だった。すると少年は銃を投げ捨て、

「そうか、ならばさっさと消えろ」

後ろを向いて、侵入してきた天井まで歩いていく。

「なぜ殺さない？」

掃除屋という仕事柄、掃除や同士で潰しあうことはこの世界の常識だ。

特に、敗者が生き残ることなど滅多にない。

「俺達の社長は殺しを認めねえ人だな。

特に俺たちガキにはそういうところは厳しいんだ。
だから、絶対に敵に回るなよ?」

そして飛び上がり、その場から消えるのだった。

「警察だ!」

ドアの外から声が聞こえる。

それを聞いて敗者の掃除屋達は一斉に消えた。
その場にいれば、自分達も逮捕される可能性があるからである。

「隊長、あの少年は一体……」

外に出た掃除屋達は、隊長に尋ねた。

そして、冷や汗を掻いた隊長は、

「二度と会いたくねえな。あいつは「TEAM」のバスターだよ」

ただそう言つて、自分達の本部に帰っていくのだった……

第一話：少年の名は篠原快

全ての任務を片付けた少年は、早速警察署でもてなされていた。ただし、あくまでも子供のもてなしに違いないが……

「快君、任務ご苦労だったね」

快と呼ばれた少年の前にオレンジジュースが差し出される。せめてコーヒーぐらいにして欲しいが、この時枝警視總監に言っても無駄だろう。自分の親友の父親なので、嫌でもその性格は分かってくる。それも息子と比較すればするほど溜息を付かずに入らなくなるのだ。

「いいえ。無事に解決して何よりでした」

冷静な口調で快は答える。

サングラスをはずし、先ほどの黒尽くめの格好から普段着の白シャツとジーンズに替えた少年は、任務報告のために警察署にやってきた。

これも掃除屋の任務の一つなのだ。

「相変わらず父親とは正反対の性格をしているな」
「反面教師ですからね」

これも快は軽く受け流した。

自分の父親は尊敬できる点もあるにはあるのだが、

「こんな男にだけは絶対なりたくない」ランキングナンバーワンにも違いないのだ。

出来るなら自分の父と幼馴染である時枝警視總監に、自分の父の話などしたくはないのである。

「そうか。まっ、うちの修も君と同じような心境なんだろうな」

時枝警視總監は妙に納得していた。

そして、オレンジジュースを飲みきった快は立ち上がると、

「それでは俺はこれで」

「ああ、夢乃さんによろしくな」

夢乃は自分の母親の名前。

そして時枝警視總監とは幼馴染だ。

「はい、失礼します」

快は瞬身でその場から消えるのだった。

第二話：TEAM本社

篠原邸兼TEAM本社は、近所でも有名な巨大な豪邸である。その広さも東京ドーム並みというところだろう。

そしてこの豪邸には多くの人間が住んでいた。少なくとも五十人はいるだろう。

さらに贅沢にも一人一部屋、トイレバスつきと言っなかなかのしゃれた部屋が用意されている。

その部屋と別に食堂・トレーニングルーム・プール・体育館・温泉という

リゾート顔負けの施設まで取り揃えられていた。

しかし、全員が血縁関係にあるわけではない。

むしろそうでないものの集まりだ。

言うなれば、会社の上司と部下達、友人関係、昔からの幼馴染などである。

そしてこの豪邸の主は、類まれなる才と強さを持ち、「掃除屋」という世界では知らぬものがまずいない。

その主が結成したのが「掃除屋・TEAM」。

史上最強の軍団と謳われ、おまけにその部下達と言えば……………

「快ちゃん！ おかえり！ 一杯やっていかねえか？」

「おいおい、未成年に酒を勧めるなっ！」

「別にもう十五歳なんだから飲めるだろ？」

「だから、やめなっ言ってるんだよ」

帰った早々、食堂に足を運べば大人達の宴会である。

いつものことであるといえども、この大人達が本気で世間を騒がしている「TEAM」の幹部達なのかとかなり怪しい。

下手をすれば何処かの酔っ払いより性質が悪そうに見える。

「快、夜食食っていくだろ？」

住み込みコックの大地が快に尋ねた。

快と同じ高校一年生だが、大地の父親がこの総料理長なため、すっかり料理の道に引き込まれてしまったのである。

学校の制服より、コックの格好をしている方が、大地という人物像にはしっくりと馴染んでいた。

「ああ、貰う。他の奴らはどうした？」

自分の幼馴染達が珍しくここにいないので快は尋ねると、

「任務だ。まっ、そのうち帰ってくるだろうよ」

すばやくチャーハンを作り上げ、日に焼けた手が快の前にそれをおいた。

「そうか。大丈夫なのか？」

「何がだ？」

特に心配がないメンバーなので、逆に大地が聞き返すと、
「修はともかく、他の奴らがちゃんとテスト勉強してるのかと思っ
てな」

それを聞いて大地はコンソメスープとサラダを追加した。
そして、両手を合わせて頼み込むのである。

「快様！ 助けてください！」

「知るか、自分で何とかしろ」

食にはつられない快は、きっぱりと言いつつた。

第三話：高校生

「だってよ、快。俺、普段はここでコックやってるからまともに授業受けてないんだよ」

「俺だって任務で抜けてるさ」

しれっとした態度で快は答える。

ここの高校生達は、常に出席日数と戦う羽目にあるのだ。

ただ、快の場合は常に成績優秀なので、特に勉強で困るということはないのである。

「大丈夫だって！ 快の実力なら東大だって余裕なんだろう？ ここは一つ頼むよ！」

「何をかける？」

ただで動かないのは快ならでは。

しかし、バスターという性上、それは仕方のないことだと大地は知っているので、

「ちゃっかりしてるよな。こいつでいいか？」

大地はテーマパークのペアチケットを取り出してきた。

「翡翠との思い出作りに」

「のった！」

長年の付き合いは、お互いの利益を追求した関係を作り出せる。しかし、さすがに気の聞く少年は大地に尋ねた。

「だけど良いのか？ お前が使うはずだったんだろ？」

それは間違いなく、大地の彼女と一緒に行動しようとしていたものだろう。

「別にいいさ。お前と違っていつまでも告白できないわけでもないからな」

「やっぱりこの件はなしってことで……」

「嘘だって！ 快様ご勘弁を！」

恋愛ごとで快をからかえば、間違いなく彼を敵に回すことになる。快の気が変わらないように、大地はそれ以上の恋愛話はしなかった。

掃除屋といえども、快は毎日高校に通っている。「箒星学院」。

自由な校風と部活動が盛んなありふれた高校である。

快の家に住む掃除屋の高校生達は、大半がこの学院に通っていた。もちろん近所にも他の高校もあるわけだが、箒星学院に進学した理由を聞かれれば、

「親の母校だからなんとなく」と快は答えるだろう。

しかし、それ以外の理由もちゃんと存在しているのである。

むしろその理由の方が大半を占めているという噂だが……

「それでは今日はここまで！ 解散！」

「ありがとうございました！」

威勢のいいサッカー部の面々が今日も練習を終える。

そのほとんどがしっかり日焼けをしていて、鍛え抜かれた肉体が

まぶしく見える。

しかし、その中でも特に目を引くのが快だった。

他の部員より明らかに細いのだが、監督すら認めてしまうほどしなやかな筋肉を持っていた。そのおかげか、もともとが美少年な性か、

彼の周りにはいつも女子の黄色の声が耐えることはなかった。今日も誰が快到にタオルを渡すかもめている。

「おつかれ」

「おう、おつかれ」

自分と同じ掃除屋であり、長年の幼馴染である片岡翔は、頭から水を浴びていた快到にタオルをかけた。

快より三センチほど高い身長に焦げ茶の髪色と茶色の瞳を持つなかなかの美少年だ。

女子の楽しみを毎日奪っているのは間違いなくこの少年である。

部屋も快の右隣、何かあればすぐに快の部屋に邪魔しに来る悪友である。

「快、お前に面白いニュースを持ってきたんだ」

「ニュース？」

少し口元が吊り上っているのを見れば、間違いなく彼にクリーンヒットしたネタだと快は直感した。

「ああ。今日中松がな、翡翠に告白するんだと」

快は水道の蛇口を止め、静かに答えた。

「随分物好きだな」

翔に表情を見せないということはそれなりに、いや、かなり内心あせているということは 長年の付き合いで分かっている。

翔は苦笑を押し殺して平然とした態度で言った。

「早く行った方が良いんじゃないの？ 付き合うことはないにしろ、デートの一回はあり得るぜ？」

快は頭を拭きながら、静かに歩き始めた。

第三話：高校生（後書き）

久しぶりの更新です。これから少し速めのペースで更新していきます。

第四話：風野翡翠

シチュエーションはばっちりだった。

桜の花びらが舞う木の下。

男女にとってこれほどの告白場所に適するものはない。

中松は翡翠の澄んだ茶色の目をじっと見つめて、

「あの、風野さん。俺……君のことが好きなんだ！ 付き合
って下さい！」

人生の一大決心。

中松は長年の思いをようやく風野翡翠に伝えたのである。

ふわふわした美少女は桜色の頬に少し赤みを帯びさせたが、

「えっと、誰に頼まれたのかな？　きっとクラスの皆のいたずらの
種にされたんでしょ？」

につこり笑って翡翠は答える。

さらさらしたボブカットが揺れた分だけ、

中松の心もこけたのだった。

翡翠たちのクラスメイトはたいていお祭り好きだ。

特に中松はからかわれる対象になってることも知っていた。

「違うよ！　俺は本気で……！」

「すまん、翡翠。あいつらがまた面白がって悪戯したんだ。悪かつ
たな、中松」

「篠原！」

今一番出てきて欲しくない人物が現れた。

そして、その人物の登場に翡翠の目は輝くのだ。

「えゝ！ 私、本当に告白されたのかと思ったよ！
ちよつと嬉しかったのに」

逆だということぐらいその場にいるものなら誰でもわかる。

少しだけ膨れっ面してるのは、快に自分の気持ちを知られたくないから。

そして、いつもは人一倍鋭い癖して、
彼女のことになると全く鈍感になってしまう快は、

「翡翠、お前が好きだっていう物好きがどこにいるんだ？
よく考えてみるよ」

元々が冷静、秀才の代名詞を背負っている快に、
翡翠は一言も発することができない。

「いいか、お前が生まれて十六年間、
俺はほとんどお前と同じ屋根の下に暮らしてるよな。
その間で一度でもお前に彼氏が出来たなんてことがあったか？
それ以前に告白されたことがあったか？
浮いた話ひとつ出たことがあったか？」

中松は心の中で真っ青になっていた。
翡翠に恋話ひとつも出ないわけがない。
それだけ彼女はモテる。

だが、それを全て快が妨害しているに違いないのだ。

「そんな、ひどいなあ」

純粹、單純の代名詞を背負う翡翠は、快の裏工作も知らず、ただただ納得するのであった。

「とりあえず、修達も待たせちまってるから早く帰ろう。

今晩は皆でバーベキューやるみたいだからな」

「うん。それじゃあね、中松君」

「風野さん！」

中松が呼び止めようとしたが、快はいつもよりでかい声で翡翠に話しかけた。

「翡翠、今度二人でクリーランドいかねえ？ 大地の奴がタダ券くれたんだ」

「行きたい！ 大地ちゃんありがとう！」

もはや二人の世界に手を出すなと言う威嚇であった。

そして、その一部始終を見ていた者達は、口々に同情の声を漏らすのだった。

「かわいそうに、中松」

「仕方ねえさ。相手が悪すぎる」

一部始終を見ていたサッカー部員達は中松に同情するのだった。

「それにしても、快の奴もいい加減素直になればいいんだよな。白の奴みたいによ……」

いつまでたっても告白しない快到、
少しだけ非難の声もあがるのだった……

第四話：風野翡翠（後書き）

ようやくヒロイン登場！ 天然の天使という感じの翡翠ちゃんは私のお気に入りです。

第五話：時枝修

メールに書かれた文字は「先に帰る」。

短いのは相変わらず奴らしいと思いつながら、翔は走った。

送られてきたのはほんの数秒前なら、

きっと待っているはずだ。

そして剣道用具一式抱えたメールの送り主は翔に気づくと、

「遅い」

その一言を言い放った。

生まれたときからの幼馴染、幼稚園からずっと一緒だった親友、

時枝修は木にもたれ掛かって待っていた。

時枝警視總監の息子である割には、真面目に勉強している優等生。素通し眼鏡はその象徴のよう。

身長も伸び盛りなのか、もうすぐ180に届きそうだ。

そして、修もバスターなため、快の家に下宿中である。

しかし、彼の家は快の家から数百メートルも離れてはいない。

任務がしょっちゅう自分の親に持ってこられるため、

快の家に下宿した方が何かと都合がいいのであった。

そして孝行息子でもあるので、休みの日になれば母親のみ、顔見せにぐらいいは戻っている。息子曰く、

「父親に見せる顔など必要ない」

とのことだ。決して父親と喧嘩している訳ではないのだが……

スポーツも幼いころから続けている剣道で全国準優勝の腕前である。

「悪い。翡翠の奴が告白されていて快が邪魔に入ってたからさ」

苦笑しながら翔は答えると、

「そういうことか」

快と毎回学年トップを競っている修に、
余計な説明など要らない。

「それより、白達はどうしたんだ？ 一緒じゃなかったのか？」
「ああ、あいつなら空手部だ。紫織を迎えに行ってるからよ」

第六話：色鳥白真

この日も学校は平和だった。

普段通り退屈な授業を受けて、体育はサッカーで、部活は剣道で、そして校門で待っているはずの幼馴染と一緒に帰るのだ。同じ家に。

「遅くなっちゃったな。怒ってないといいが」

少年は校門まで走る。色鳥白真。この学院の名物生徒。

端正な顔立ちは快と女子の人気を二部にするほど。

しかし、どこか子供っぽさが残っているのは彼が十五歳だから。

肌の色は女の子が羨むほど綺麗な白で、目の色も綺麗な茶色。

全体的に細いが、無駄なく身体は鍛えられており、その辺のチンピラ以上に腕も立つ。

オーラの色は彼の気分によってクルクル変わる。

彼の友人いわく、幼馴染の彼女といるときは薔薇色である。

そして、今まさに愛しの幼馴染のもとへ猛ダッシュ中だ。

そしてその幼馴染は……

「いいじゃん、来ない彼氏なんかほっという俺達と遊びに行こうぜ」
「嫌です！ 放してください！」

「可愛い声だなあ。もろ俺のタイプ！」

美原紫織は掴んでくる腕を振り払う。周りの生徒達も教師たちも、騒ぎは知っているが助けようという気配はない。

それは不良が怖いからというだけではない。

紫織がバスターだと知っているからでもない。

むしろその原因は……

「ほら、早く行こうよ」

「そうだな、車で俺達の家まで送ってくれるか？」

「白！」

車の方を見れば、いつの間にも乗り込んでいたのか、白真が不機嫌そうに足を組んで男達を睨みつけている。彼を知るものなら、その一睨みで逃げいていくのだが、

「ああん？ 何だお前？」

最悪の一言だった。彼らがこの時ほどこの学院の生徒でなかったことに

同情したものはいないだろう。

「知らないのか？ これでも学校一の人気者なんだぜ？」

多くのものが頷くであろうが、不良たちは癪に障るだけだ。

「おゝい、白！」

「いいっ！ あいつら何してんだよ！」

修達が目にした光景は、まさしく最悪だった。

この学校、いや、この学院で犯してはならない禁忌を犯す命知らずのバカがいたからだ。

「おい、お前ら！ 白から逃げろ！ 殺されるぞ！」

翔は叫ぶが、

「殺される？」

「ハッハッハ・・・！　こんなガキに何ができるって？」

「お前が何をできるんだ？」

不敵な笑みを浮かべて白真は男達を挑発するが、

幼馴染達から見れば明らかにキレているとしか言いようがない。

「ガキは大人しくしてろ！」

「胴っ！」

リーダー格の男が拳を繰り出してきた瞬間には、

白真は竹刀で相手を叩きのめしていた。

さらに流れるようにほかの男たちも竹刀で打ち悶絶させた。

「言わんこつちやない」

「俺、先に帰っていいか？」

翔の呆れ顔と修の面倒臭さ全開の声だけが、
唯一その場の時間に時を持たせていた。

「色鳥白真。高校天才バスターだよ！」

自分でここまで言うのは滅多にないことだが、

紫織をナンパしたことは死刑に値する。

相手をどん底にまで突き落とさなければ彼は気がすまないのだ。

「大丈夫か？　こいつらに変なことされなかったか？」

伸びている男達を車に放り投げながら白真は尋ねると、

「大丈夫、ありがとう。それより、白も怪我はない？」

あるわけではないのだが、紫織は聞いてやる。

「あるわけないだろ？ それより、翔と修ちゃん！ 帰ろうぜ！」

その場から逃げ出そうとしていた修は、今日一番のため息をつくのだった。

第六話・色鳥白真（後書き）

白ちゃん登場！ これで今回の主役達が勢ぞろいしました！

第七話：嵐の前

「ええ〜っ！ また快ちゃん邪魔したのか！」

「翡翠も本当に鈍感ね……」

一悶着あつた帰り道。

白真と紫織は相変わらずな友人達のやり取りに、それぞれの言葉をつむいだ。

「だろ。サッカー部の連中が一部始終を見てたらしいんだけどよ、いつも通り快のやつが邪魔に入って、翡翠を掻っ攫って行ったんだつてよ」

サッカー部のメンバーからのメールを生は紫織に見せると、

「かわいそうに。中松君も報われないわね」

紫織は改めて中松に同情した。少なくとも彼女の情報では、中松が翡翠を好きになって約三年というところだ。

中学入学のころからだと思えば、

それはかなり重たいものに違いない。

しかし、それを快がいつもの独占欲で

水の泡にもならないほど碎いたのだ。

「けどよ、いくらなんでも今日当たりはさすがの快も告るんじゃないの？」

「それはないな」

修は完全に否定する。

「あいつに告る度胸も根性もあるが、翡翠にそれを理解する頭脳はない！」

「なるほど！」

三人はひどく納得するのだった。

「おい！ みんな！」

「翡翠！」

噂の主はひょっこり現れる。

そして、少々不機嫌な快も買い物袋片手にゆっくり歩いてきた。

「快ちゃん！」

白真は快に抱きついた。これも昔から「快ちゃん大好き！」の

白真ならではの挨拶。同い年に違いないのだが、

どうも白真は子供っぽさが抜け切らないのである。

真剣になるのは、紫織の事のみには違いない。

「ちょうどよかった。これ持てポチ」

抱きついてきた白真を引き剥がすのも面倒だといわんばかりに、快は買い物袋を白真の手に引っ掛けた。

「それより、お前また喧嘩しただろう。剣道部の連中から写メが届いたぞ」

そこには無惨な不良たちの姿が写っている。しかし、

「ん？ 普通だろ？」

全く悪びれた様子も見せないのは白真らしい。
それだけ彼女の紫織が大切だということは、
昔からの付き合いで嫌って程知らされてるので何も突っ込まない。

「あんまり面倒起こすなよ。」

うちもこんな奴等に構ってられるほど暇じゃねえんだからよ」

「さすが跡取り息子だね」

自分の家の仕事内容と危険な芽を快は父親以上に見逃していない。
そうでなければ、「TEAM」は危険にさらされる
ことにしかないのだから・・・

「おかえりなさい！」

「快ちゃん！ 早く来い来い！」

「急がないとお酒なくなっちゃうわよ！」

「未成年に酒ばかり勧めるな！」

やはりいつものこと。

広い庭でのバーベキューは、春・夏にかけて月二回は必ずやっている。
いる。

任務で参加できない者もちらほらいるために二回はやるのだ。

「快、頼んでたもの買って来てくれたか？」

料理に打ち込んでいる大地は快の方を見ずに訪ねると、

「ああ、とりあえずこんだけ肉があれば少しは持つだろ」

「サンキュー。それより他の奴等は？」

快だけ帰ってきたことに少しか疑問に思うと、

「修と翔はさつき料理長から追加を頼まれて買出しに行った。

白は酒蔵から追加の酒を取りに行ってる。

翡翠と紫織は花火がやりたいんだとよ」

「花火って……今、春だろ？」

売ってるかどうか怪しいものを、翡翠はよくやりたがるのだが、

「去年の残りでも使っくんじゃねえの？」

母さんが去年大量に翡翠のために買ったからよ」

自分の母親は、いや、「TEAM」の社員たちは翡翠にとことん
甘い！

「我慢」という言葉を教えたのは、間違いなく快に違いなかった。

「それより、あのお祭り馬鹿はどこにいるんだ？」

「お前、一応父親だろ……」

快の言様に修は突っ込む。

しかし、快と全く真逆の性格の持ち主にはぴったりの言葉と否定
できないのだ。

「後から来るってよ。なんか近いうちに

でかい仕事が入りそうだって言ってたからさ」

「厄介なことにならなければいいがな」

「無理じゃねえ？ お前の親父だろ？」

大地の言葉は嵐の前触れを感じさせた。

第七話：嵐の前（後書き）

とりあえず、この作品の登場人物の自己紹介をやっておきましょう！この回は……

『篠原 快』（シノハラ カイ）

容姿端麗・成績優秀・運動神経抜群の主人公。

出来ないことがこの世にあるのかと思われがちだが、

家事全般はほぼダメ。ゴミ捨て以外出来ない不器用ぶり。また翡翠

や白真によく振り回されている苦勞人。部活はサッカー部、掃除屋

「TEAM」では隊長を務める実力者だ。

第八話：バスタークラス

昨日の疲れも何のその、風野翡翠は相変わらず元気である。同じクラスの「TEAM」のメンバーは爆睡していても、彼女の授業中の態度はいたって真面目である。

そんな彼女は、ただいま職員室に呼び出しを食らっているところである。

ただし、指導を受けることはまずないが……

「失礼しました」

合気道部の顧問から職員室に呼び出されていた翡翠は、ようやく解放されて教室に戻るところだった。

一年生ながらも、次の試合に出られることになったのである。しかし、バスターの任務を請け負っていることは職員達に知れ渡っているため、

日にちを聞かれることになったのだ。

それだけ翡翠は強いんだから……

「ご飯！ 試合！」

上機嫌になりながら、翡翠は彼女を待っている友人達の下へ急ぐ。しかし、

「風野翡翠だね。ちょっと顔かしてくれない？」

突如かけられた声に翡翠はクエッションマークを飛ばしながら、翡翠はついていくことにした。普通なら「リンチだろ！ 気づけよ！」と、

間違いなく快に突っ込まれそんな形相をした女子たちに・・・

体育館裏はまさにいじめの絶好のスポットだった。
着いた途端、翡翠は壁に突き飛ばされる。

「いたいなあ」

けして痛いわけがないが、翡翠はとりあえず言う。

「あんた、快君の彼女なんでしょ！ それなのに何？
修君や翔君だけにとどまらず、白真君にまで手を出すの？」

一体どこをどうすれば快の彼女になってしまったんだろうか？
それに修と白真には立派な彼女がいるので、

「出さないよ。白ちゃんも幼馴染なんだもん」

彼女に言わせればまさに事実である。
しかし、快たちのファンクラブがそれで納得するわけがない。

「ちゃん付けが馴れ馴れしいんだよ！
だいたい、高校生にもなって男の子にちょっとちやほやされてる
からって

調子に乗ってるんじゃないわよ！だから女の子の友達がいらないん
じゃないの？」

女子達の高飛車な笑い声がこだます。
しかし、翡翠はぐっと堪えた。

自分が本気を出せば、十数人の女子ぐらい簡単に殺してしまえる

からだ。

何より、「我慢」を覚えてくれた快到に申し訳ない。

「本当のこと言われて言い返せないでやんの！　可愛いそうな子だね！」

「それ、俺達を敵に回したい発言ととってもいいよな？」

女子達の背後に、仁王様も青ざめるような眼光をして快到は立っていた。

その登場にすべてのものが驚く。

「快到！」

「か、快到君！」

言葉を発したと同時に、快到は翡翠の腕を掴んで自分の方に引き寄せた。

そして怒る。

「翡翠、こんなアホどもに関わってるんじゃないよ。

それに傷付く必要もない。お前は俺達の仲間なんだ。

一人じゃねえし、女友達がいらないわけでもないだろう。

少なくとも俺のクラスの女子どもがこれを知ったら、

お前達生きて帰れねえぜ？」

その瞬間、その場は史上最低の温度が到来した。

クラスメイトの女子達が、タッグを組んでやってきたからである。

「翡翠になんか用？」

そこにいたのは紫織をはじめとする女子達だった。

全員が恐ろしい眼光でファンクラブの女子をにらんでいる。

「翡翠を連れていったって聞いたからまさかと思ったけど、こんなバカなことをやっていたなんてね。回し蹴りと踵落とし、好みの方をお見舞いしても良いけど？」

キレた紫織は怖い。翡翠が絡むと特に怖い。

幼馴染の快はそれを良く知っていた。

さらに、クラスの女子達はほとんどが体育会系である。

敵に回すと命はまずないのだ。

しかし、快はそれを気にも留めず、翡翠の肩に手を回すと

「それじゃあ、行くとするか」

後のことは露知らず、快は翡翠をその場から連れて行った。

「快、ありがとう」

「どういたしまして」

少しだけ快は不機嫌だ。（実際はそれどころではないが）

表情を見せないときは絶対そうだと翡翠は知っている。

だが、翡翠は尋ねた。

「ねえ、快。私やっぱり馴れ馴れしいのかな？」

高校生にもなって男の子にちゃん付けなんて。

それにさっきの子達だって、快達のファンだから私が目障りなんだよね」

「ほっときゃいいんだよ、そんな奴」

「良くないよ。みんな快達が好きだからあんなこといったんでしょ

「？」

涙目になる翡翠に快はポンと頭の上に手を置いた。
そしてゆっくりと撫でてやる。

「翡翠、お前はお前のままで良いんだよ。変わる必要なんてない」
「だけど……」

「翡翠、俺達はいいつらとは違う絆がある。
それをお前が壊す必要は無い。お前はここにいて良いんだ。
お前じゃなきゃダメなんだ。分かってるだろう？」

「バスターは信頼がものをいう」。掃除屋という職業柄、チーム
メイトとの
信頼関係は絶対だ。お互いの命を預けることだって少なくはない
のだから。

「それによ、お前が「篠原君」とか「色鳥君」なんて言ってるほうが
よっぽど気持ち悪い。修は間違いなく眩暈起こして倒れるぜ？」

想像がづくだけに快は絶対やめてもらいたいと思った。
翡翠一人の言動が、回りすべてを混乱させることなど、
幼いころから知っている。

事実、それが今の「TEAM」だから……

「箒星学院 バスタークラス」。
それは掃除屋を営むものたちで編成されたクラスだ。
バスターでないものたちの授業妨害にならないために、
学院側が配慮したからである。

「おっ？ 翡翠、大丈夫だったか？」

「お前の彼女が出張ったんだから平気だろ」

紫織の空手の腕前を知っているからこそ、

修は逆に呼び出した女子達を哀れんでいた。

手加減してはいると思うが・・・

「翡翠ちゃん！ こっちに美味しいお菓子があるからいらっしやい
！」

文科系クラブの女子達が翡翠を呼ぶと、

「食べる〜！」

子犬のように翡翠は飛んでいった。

『あいつのどこが女子の友達がいなくて言うんだ？』

むしろクラスのマスコットの存在に、

「友達皆無」という言葉ほど似合わないものはない。

「ただいま」

「おっ！ おつかれさん、紫織」

白真が手を上げる。

「で、いったい何してきたんだ？」

翔が興味本位で尋ねると、紫織はにっこり笑って、

「知りたいの？ 女子のドロドロな関係」

「遠慮します」

翔はその笑みだけで全てを拒絶した。

「しーちゃん！ お菓子食べない？」

「いただくわ！」

バスタークラスは実に平和だった。

第八話：バスタークラス（後書き）

では、人物紹介第二回目は・・・

『風野 翡翠』（カゼノ ヒスイ）

天然・鈍感のふわふわした心優しき女の子。

快のことが好きだが、ずっと片思いしている状態。

男子にも女子にも愛されるクラスのマスコットの存在なのだが、恋

愛方面は快が毎度邪魔しているためひどく疎くなった。

部活は合気道部、趣味は甘いもの食べつくしである。

第九話：お出迎え

昼休みというものは五十分しかない。

その間に少しでも睡眠はとりたいところだが、

このクラスの連中はそうさせてくれない。

むしろ、一番の原因は自分の父親のせいではないかと修は思っている。

窓の外をいつものようにボーっとして眺めていると、

パトカーが正門の前に堂々と止まるのだ。

「パトカー？ 何か事件でもあったのか？」

高校から修と同じクラスメイトになったものは知らない。

快が盛大な溜息をつくのと、翔がやれやれという顔をするのと、

白真がきらきらした表情を見せただけで分かるものは、

長年の付き合いであるものだけだ。

「時枝修殿！ 篠原快殿！ 警視総監がお待ちであります！
直ちに出頭いただきたい！」

「かわいそうに」という言葉はこのためにある。

修は自分の父親が警視総監であることを、

これほど謝罪したい気持ちにさせることはないと思った。

そして、やはりバスタークラスは騒ぎ始めた。

「快君！ 何かやらかしたの！？」

「修！ お前が付いていながら何してたんだよ！」

「白、お前だろ、何かやらかしたの」

「いや、翔のミスとか？」

クラスの面々は質問攻めにする。
半分はからかいと冷やかしだが……

「お前の親父さん何とかならないのか？」

快がダレながら尋ねるが、

「馬鹿につける薬はまだあっても、大馬鹿に飲ませる毒薬はねえよ」
「だな……」

それを聞いて快は大地のほうを見ると、

「ああ、夕飯作って待つてるからさ。ちゃっちやと行って来い。
ノートは翡翠と紫織に頼んどけ」

次の授業は数学。テスト前の授業に、
TEAM全員で警察署に行くなど自殺行為だ。
それを少しは考慮してか、今日は快と修だけの迎えにしてくれた
んだろう。

おそらく部下の警察官が……

「ちょっと待てよ！ 俺も行くぞ！」

「俺もついでに行く」

白真と翔も言う。

おそらく好奇心と勘という何かが働くからであろつ。

「大体、快ちゃんと修ちゃんだけ授業サボれるなんてずるいぞ！」

「だよな。こんな面白いこと久しぶりだしな！」

前言撤回。入学以来つまらない任務ばかりで、そろそろ大きなことをやりたくなっただけだ、この二人は。しかし、止めても無駄だとわかっているのです、

「じゃ、いくか」

次の瞬間、校舎の三階から飛び降りる四つの影が現れた。窓を見ていたものは茶を噴出したり、あぐり口をあけたり、失神するものまでが続出した。

そしてその騒ぎも束の間……

「チャイム鳴ったぞ！ 席に座れ！」

担任の大原の名物「チャイム代わり」が飛び出す。それを聞いて座らないものはまずいないが、今日は四つの空席がある。

「ん？ あの四人はどうした？」

「任務ですよ。今日は警視庁から呼び出されましたから」
「……………時枝か」

大原は溜息をついた。元自分の教え子である時枝警視總監を思い出しながら……………

第九話：お出迎え（後書き）

それではさくさくいつときましよう！

今回の自己紹介は・・・

『時枝 修』（トキエダ シュウ）

冷静沈着の素透し眼鏡をかけた模範的優等生。成績は毎度快と学年一位を争っているが、必ず二人とも一位なので決着は付かず。（しかし、本人たちは争うつもりはない）時枝警視總監の息子で、かなりの苦勞を背負わされている。部活は剣道部、全国大会で毎年準優勝という強者だ。負けている相手は・・・

第十話：逃げ道はなくなった

「よくきたな、高校バスターの諸君」

警視庁警視總監、そして修の父親である時枝脩三は、相変わらず厳しさの中にも優しさがある表情で快達を迎えた。しかし、息子の修は文句をたれる。

「息子の授業を何だと思ってるんだ？ この馬鹿オヤジ」

「学校の授業を受けなければならぬほど勉強が苦手になったのか？」

だてに自分の父親をやつてない。

文句を有能なものにたれることほど勝てない喧嘩もないのだ。

「間違いなく世の中の教育機関を敵に回したな」

「ああ、親の言葉とは思えねえが」

「さすが警視總監」

快、翔、白真は思つたままを遠慮なく口に出す。

「お前達を呼んだのは他でもない。白、親父さんからの依頼だ」
「親父が？」

白真はきょとんとした。白真の父も「TEAM」の幹部だ。しかし、いつもどこかに飛ばされているので、本社に戻るなど年一・二回あればいいところである。

「ああ、『ブラッド』という組織は聞いたことがあるだろう？」

その言葉に四人全員に衝撃が走った。

知るも知らぬも、彼らにとっては忘れもしない掃除屋である。

「まさか、そいつらと一戦やれってことか？」

「そういうことだ。もちろん断つても構わないがな」

珍しく任務を選ぶ権限を与えられた。

それについて修は意見する。

「構わないって、バスターの依頼は絶対だろう。」

警察としても立場が悪くなるんじゃないのか？」

警察と掃除屋は互いに協力関係にある。

しかし、実質のところ、掃除屋のほうが権力が上だともいわれている。

警察に手出しできない事件を、掃除屋はこなさなくてはならない。

その任務を提供するのが警察であり、

またサポートもしなければならぬのだ。

特にバスターの依頼となれば、世の中の信頼を失わないためにも警察が動かないわけにもいかない。

見捨てれば、「警察」という組織を掃除屋が潰す恐れもあるからだ。

ただし、それがこの警察庁で起こらない理由はただ一つ。

「TEAM」の名がそれをさせないのである。

「うちの親父なら平気だ。どうせ、救援を求めているんじゃないんだろっ？」

白真は面白くなさそうに言った。
一度くらいくたばりかけた方がいいと思っっているからだ。

「ああ、間違ってもそれはないな。ただあいつも多忙だから、自分の弟子達にこの任務を押し付けてやろうというところだろう。それにこいつの支払いと一緒にな」
「持って帰らせていただきます！」

白真は心のそこから侘びをした。
自分の父親が警察に遊び金を払わせるなどんでもないことだ！
国民の税金を何だと思ってる！と心の底から激怒した。
それを快が白真の手からとり、

「白、こいつはうちの親父に払わせたらいい。
それより、時枝警視總監、今回の任務内容は
親父のところに送ってあるのでしよう？
それをわざわざ俺達を呼び出したのには訳があるんですよね。
話していただけませんか？」

快が真面目な顔をしてたずねると、
時枝警視總監は四人の表情を見ながら話しはじめた。

「お前達を正直この件に関わらせることは俺は反対だ。
バスターといえども、お前たちはまだ高校生だ。
学生らしく勉強に明け暮れた方が普通はいいだろう」
「教育機関を敵に回す奴が正論か」

修が思いつきリツツコミを入れる。

「だが、お前達は並大抵のバスター達に比べて卓越した才と力をも

っている。

あいつはそれを見越してこの依頼を持ってきたんだ。よく考えることだ」

そして手渡された任務内容を見ながら、

四人はパトカーで学校に送られることになった。

時間は経ち放課後・・・

「『よく考えろ』か。俺は面白そうだからいつでも受けようと思ってるんだが」

「白らしいな。まっ、俺もそうしようとは思ってる。断る理由はないが・・・」

快はそれ以上言葉がつむげなかった。

全員考えることは同じだった。

「ブラッド」は自分達に生まれて初めて死の恐怖を与えた掃除屋だった。

あの事件からもう何年も経っている。

あの幼かった自分達は強くなった。

白真の父親がありえないきつさで修行をつけてくれた。

それに耐えて今があるというのに、

どうもいつもの冷静さを快は保てなくなっている。

それぞれの思いをめぐらせながら、

快は食堂に入ると、

「よう、帰ってきたか」

大地が夕食の仕込みを始めている。
今日は豪勢なメニューということは匂いで分かる。

「今日は誰かの誕生日だったか？」

何かに託けて騒ぐのはこの掃除屋ならではの。

「いや、お前達の最後の晚餐作りだよ」

それが全てだった。快は覚悟を決めると、

「親父のところに行つて来る・・・・・・・・」

そう告げるとぼとぼと歩き出した。

任務を受けるといふ前に最後の晚餐を作らせているといふことは、
もう逃げ道はないということだ。

第十話：逃げ道はなくなった（後書き）

では、続きましての登場は……

『色鳥 白真』（イロドリ ハクシン）

「快ちゃん大好き!」、「紫織は俺のもの!」的な高校生。その明るく活発な性格はムードメーカー（トラブルメーカー）である。

しかし、楽天的な性格の割には、将来医者になるという目的を持っているしつかりした芯の持ち主。なので以外に成績優秀である。

部活は剣道部、全国大会三連覇の実力者である!

第十一話：篠原義臣

食堂から東へ約三十メートルの渡り廊下を抜ければ、そこにはTEAM本社の社長室がある。

そして、その渡り廊下の途中に自動販売機を数個置くのは自分の父親の趣味。

そんな父親の元へと快は行くのだ。

社長室にたどり着けばまずやることは一つ。

部屋のドアをノックして、

「失礼します」

快は部屋の中に入った。

相変わらず、西洋のソファやテーブルやらとお洒落な家具が並んでいる。

それにティーカップは快が昔、結婚記念日に両親にプレゼントしたもの。

だが、当の社長は、

「おう、帰ってきたか。おかえり」

「TEAM」の社長にして快の父親、篠原義臣はご機嫌だった。それに相変わらず焼酎ビン片手に、ほろ酔い気分もいつものこと。彼の後ろにかかつてある背広は、もはや何のためにあるのかわからない。

生まれてこのかた、ラフな格好しか目撃したことがなかった。今日のTシャツとジャージはまだマシな方か……

「ただいま。大地が最後の晩餐を用意するような任務って何ですか？」

冷めた息子の視線が義臣に刺さる。

「おつ、もう情報が回ってたか。それなら話は早い。

ミッシヨン名「死の二日間」とでも言っておこうかな」

「息子の意見はなしですか？」

「どうせ受ける気だったんだろ？」

ケタケタと笑う父親は、生まれてこのかた真面目に何かをしたことがあるのかと

疑いたくなる。しかし、口答えしたところでろくなことにもならないので、

快はさっさと任務内容だけを聞き出すことにした。

「それで、メンバーと任務内容は？」

「お前を隊長に、翔、修、白真の三名をつける。

援軍によこせるといつても翡翠と紫織ってところかもな」

「最悪だな。この会社もついに潰れる日が来たか」

「跡取り息子が死ねばの話だがな」

義臣は苦笑した。だがそれもすぐに終わり、珍しく真面目な顔をして話し出した。

「とりあえず本題に入る。先週、「ブラット」に掃除屋が三件潰される事件が起きた。

それもかなりの手練のな」

義臣は書類を快に投げ渡した。

「確かに、掃除屋の一流どころだ」

何度か目にしたことある名前に、さすがの快も少々驚いた。

「俺としてもこれ以上奴等の好き勝手にさせるわけにはいかなくな、

白の親父さんからの依頼でもあるから奴等を潰すことにした。

まっ、あいつの救援要請じゃないだけお前達の任務は楽だと言え
ば楽だが」

自分の親友だけに、義臣は危険な任務を頼んではいたが・・・

「ただし、幹部クラスには夢乃さんの隊が出る。お前達にやつても
らう任務は」

「援護はゴメンだ。こっちもバスターとしての借りがある。特にこ
の男のな」

それは時枝警視總監から渡された書類だった。
その書類に目を通し、義臣は快の顔を見ると、

「いつになく冷静さを保てていないじゃないか。やはりこの任務か
らはずすか？」

真剣な顔をして義臣は尋ねると、

「それもゴメンだ。それに冷静じゃないわけでもない。

俺しかこの男を始末できねえと思っただけだ。そうだろ？」

快もそれに対抗するかのような眼差しで答えた。

こうと決めたことに対しては、たとえ社長命令でも自分の息子は動かない。

それを知っている義臣は、

「いいだろう。ただし、無理だけはするな」

初めて快を怯ませる空気を発した。

こんなに真剣になってやったことなど、おそらくあの日以来だ。

「了解」

快は瞬身でその場から消えるのだった。

そして三十秒後、

「夢乃さん、やっぱりそっちが援護になりそうだ」

穏やかな表情で義臣は笑うと、

「あなたの子だもの。分かっていたわ」

隣室から快の母親である夢乃が出てきた。まだ年若く、その辺の女優以上に美人。

ふんわりした笑顔でいつも心を暖かくしてくれる。

そんな彼女を射止めたは、かなりの果報者だと掃除屋業界の中でも噂されている。

「とりあえず、こっちも出来るだけの援護はする。」

「夢乃さんも無理はしないでくれよ」
「大丈夫です。私はプロですからね」

夢乃はにっこり笑うのだった。

第十一話：篠原義臣（後書き）

でわでわ、自己紹介です！

『片岡 翔』（カタオカ ショウ）

快の悪友にして、翡翠とは「カレカノ出来ない同盟」の盟友。とにかく平々凡々の少年。

しかし、仲裁役になったり、困ったときのサポートは必ず翔がやっているので、周りの信頼は厚い。

部活はサッカー部、趣味はゲーム全般であり、かなりのゲーマーである。

第十二話：全ての始まりの日

社長室から再び食堂に戻った快は、最後の晚餐に手をつけ始めた。

もちろん、修・翔・白真も一緒である。

そしてさすがは長年の付き合いなのか、好物のビーフシチューを作ってくれるあたり、

ここの悪友コックは気が利くやつである。

「ブラットか……。思い出深いな」

大地が水を注ぎながらに言つと、

「ああ、最悪の敵だよ」

今でも忘れない、あの日の出来事を買いは脳裏にめぐらすのだ。

「快、あくまでも冷静にな。お前が取り乱すと全滅するおそれもあるんだからな」

修は真剣な表情をして快に言う。隊長が弱気では、士気にかかわってくるからだ。

しかし、それは無用といわんばかりに快も答える。

「親父にも言われたよ。だが、お前達は逆に疎むな。俺達は強くなった。それだけは事実なんだ」

それは夏の暑い日。小学二年生だった快たちの、初めて命の危機にさらされた任務であった……

「快ちゃん！ 遊ぼう！」

外から元気のいい女の子の声が木霊した。

その声を聞き、二階の窓が開けられる。

そしてその部屋の主は時計に目をやった。

まだ朝の七時。今日は日曜日。

いかに少年が天才であっても、小学二年生にしては体力がであつたとしても、

眠い日は眠いのである。

「翡翠、まだ七時だろう………」

黒目黒髪、白い肌、どんな女の子でも、

必ず彼を見れば好感を抱かずにはいられない容姿。

幼いながらも落ち着いている少年は、朝早くからの来訪者に起こされた。

「もう七時だよ！ 白ちゃんも修ちゃんも起きてくれたよ！」

ダークブラウンの髪に茶色の目。白い肌には人一倍傷跡を作っている。

どんな男の子でも、必ず彼女を見ればお転婆だと思わずにはいられないだろう。

しかし、可愛さはその辺の女の子の比ではないことも確かだった。翡翠は二階の窓まで飛び上がると、靴を棧の上に乗せて快の部屋に侵入した。

「お前な、不法侵入で父さんに言いつけるぞ」

「おじ様は起こして良いって言ってくれたもん」

不法侵入を認める父親はここから健在である。

「ほらほら、早く着替えてよ！ 皆待ってるんだから！」

翡翠は快を囃し立てるのだった。

第十二話：全ての始まりの日（後書き）

それでは、恒例の自己紹介です！

『美原 紫織』（ミハラ シオリ）

白真の彼女で、「ミス・箒星」に選ばれた美少女で才女。そして、翡翠に何かがあれば、クラス中の女子を総動員できる人脈のある人気者。

快と違つて、今まで告白されるのを白真に妨害されたことはないが、絡まれたところには、白真が出てこなかったこともないという・・・

部活は空手部。空手三段の実力者だ。

第十三話：真剣な遊び

「おはよう、快！」

「やっと来たか」

「おはよう」

「快ちゃん！ 遅いぞ！」

翔、修、紫織、白真はそれぞれに言う。

しかし、今日はいつたいなんの集まりだか快にはわからなかった。いくら翡翠が遊ぶとは言っても、

朝の七時からたたき起こされることは滅多にない。

「ようやく集まったようだね」

「氷堂さん！」

子供たちの目が輝いた。

この朝から刈りだされたのは、「TEAM」幹部クラス、氷堂仁だった。

「すみませんでした！」

快はそれだけで深々と頭を下げた。

翡翠に甘い氷堂のことだ。

間違いなく朝から遊んでくれとせがまれたに違いない。

「いやいや、快ちゃん。俺も朝からしか遊んであげられないからさ、こんな時間に起こしてしまつてすまないね」

もともとが善人顔だけに、快はこれ以上ないおわびをするしか

なかった。

それにだ。おそらく自分の父親も「遊んでやれ」といったに違いない。

「快ちゃん、折角なんだから早く遊んでもらおうよ！

バスターにとってもいい修行になるんでしょ？」

「それは一理あるな」

白真の言葉に修も同意する。

二人の共通点は「結果オーライ」に違いない。

「そうそう、君達の実力を俺も知りたいしね。

じゃないと、俺がいつ隠居していいかわからないだろう？」

「隠居つて……まだ氷堂さん二十代前半じゃ……」

紫織はツツコム。バスターは体力が続く限り引退はない。

世の中には八十を過ぎてても、現役バリバリに働くものもいる。

そして、まだ二十代後半の癖して、

現役バリバリに働いてるのかも疑わしいのがこの「TEA

M」の社長だ。

氷堂のいうことも、あながち本気でとれないこともない。

「それで、今日はかくれんぼかい？ 鬼ごっこかい？

それともちゃんばらごっこかい？」

すべてが遊びのように思えるが、どれも真剣になるのがこのルール。

そして決めたのが……

「氷堂さん、それ全部だ」

快は目をきらきらさせて答えた。

第十三話：真剣な遊び（後書き）

では、いつときましょう！

『橘 大地』（たちはな だいち）

「TEAM」の住み込みコックで快のクラスメイト。バスターとしての実力は十分あるが、よっぽど人手が足りないときではないと任務には出ない。

理由は「飯のほうが大切だろう！」という義臣の独断。そして彼女持ちだが、まだ彼女の出番はあらず。

いつか出そうという作者の願望である。部活は帰宅部だ。

第十四話：発端

「全部って……いったい何をやらかす気だい、快ちゃん」

かくれんぼに鬼ごっこ、さらにちゃんばらを一遍にやる。
それではまるで……

「バスターの演習だね、快ちゃん」
「そういうことだ」

これだけで白真と修には理解できたようだ。
氷堂もそういわれれば理解できた。

「どういうこと？ 快ちゃん？」

首をかしげて翡翠が尋ねる。

「だからな、せっかく氷堂さんみたいな幹部が遊んでくれるんだから、

この気に乗じてバスターの演習をやるってことだよ。

かくれんぼも鬼ごっこも、もとは敵のアジトに侵入するためにあるだろ？」

ちゃんばらだって戦うときに必要だ。

だから、今回は翡翠が人質になって、

俺たちが翡翠を助け出すミッションだ。理解できたか？」

大まかに全員が理解できた。しかし、

「ええええ！！ 翡翠捕まっちゃうの！？ 翡翠も戦うほうがいい！」

「おいおい、翡翠は『治療系』のバスターだろ。戦いよりもサポート役だろ」

「いやだ！ 翡翠だって戦うの！」

一度こうだといったら翡翠はなかなか言うことを聞かない。

しかし、長年の付き合いと精神年齢の高さとは恐ろしいものだ。快は一言で片付けた。

「分かった。だったらお前に重要な任務をやる。

氷堂さんから逃げ出せ。それがお前の任務だ。

幹部級から逃げ出すなんて、普通はできないぜ？」

「人質やる！」

氷堂は驚くだけ驚いた。

「TEAM」を継ぐこの少年隊長は、もはやプロもいいところだ。仲間をこれだけうまく手なずけるものなど、大人でも少ない。翡翠が単純といえば単純なんだが……

「そういうことだ。氷堂さん、本気で頼むぜ？」

快はバスターの目をして氷堂に宣戦布告すると、

「ああ、じゃあ、人質はいただいた！」

瞬身でその場から消えたのだった。

そして……

「さて、この辺でいいかな、翡翠ちゃん？」

人質に場所を尋ねるのもやはり翡翠に対する甘さゆえ。
高い木の下に少しゆるめに縛ってやると、

「うん！ だけど、私もミンシヨン開始だもんね」

「いや、ミンシヨンね。それじゃ、俺は快ちゃんたちを捕まえに行
ってくるから、

少し大人しくしておいてくれよ」

これほど優しい悪人も滅多にいないだろう。
氷堂は瞬身でその場から消えた。

「よし！ がんばっちゃうもんね！」

翡翠は一気に集中した。

腹部に巻かれた縄に自分の力を流し、一気に引き千切る。
その芸当をやったのければすぐに快達と合流できるのだが、

「あれ？ 氷堂さん何か特殊な術でもかけたのかな？」

何度かこの練習をしたことがあるが、今回は簡単に切れない。
それどころか、いつも以上に嫌なプレッシャーが翡翠を襲い始め
る。

「えっ？ なにこれ！」

さっきまで緩やかだった縄が、少しずつきつくなり始める。
いくら氷堂でも、ここまで高度な術をかけるはずがない。
あくまでも子供の遊びだ。

「快ちゃん！ みんなあ！」

翡翠は涙目になり始めた。

そして、彼女の前に一つの影が現れる。

それが事件の始まりだった・・・

第十四話：発端（後書き）

それでは、今回はついに出了ました！

『篠原 義臣』（シノハラ ヨシオミ）

快の父親にして「TEAM」の社長。

いい加減さと類まれなるお祭り男で、息子にはいつも飽きられている始末。

しかし、バスターとしての実力は、もはや掃除屋の世界で知らないものはなし。かつてやってのけた所業の数々を聞きつけ、「TEAM」に入社してくるものも多数だが、彼の理想像はたいてい一日で崩される。

妻の夢乃さんにはとことん惚れ込んでいる愛妻家だ。

第十五話：TEAM総力戦

TEAM本社は今日も社長がだれている。

仕事の量は半端じゃない癖して、

相変わらず社員達をあきれさせるほどの気の抜けた面をして、書類に今にも涎をたらしそうな状態で寝ている。

しかし、それでも一点の汚れを作らないのは、

この男のなせる業なのか・・・

「社長！ いい加減に起きて仕事してくださいよ！」

「んあ？」

社員の智子の呼びかけに声だけ発するものの、

義臣は判子一つすら押しはしない。

「本当！ 夢乃さんがいないと全く仕事しないんだから！」

「だな。せめて副社長あたりが戻ってきてくれるといいんだが・・・」

「

それはいやよ。サボれないもん」

義臣はふざけて答えた。

この男はディスクワークがとことん嫌いである。

しかし、それは困ると社員たちが強制的に縛り付けるのだ。

今日も逃げ出さないように強力な術で

椅子から動かさないようにしているわけだが、

それはそれで良いといわんばかりに、

義臣は寝こけているわけである。

「あゝあ。夢乃さん早く帰ってこないかな」

愛妻のことを相変わらず愛しく思うが、次の瞬間、義臣は一気に表情を変えた！

「翡翠か！」

強力な術もなんのその、義臣は一瞬のうちにその場から消えた。

その頃……

「氷堂さん！」

「ああ！ こっちだ！」

快達も翡翠の異変に気づいた。そして、急いで翡翠の元に駆けつけると、そこには惨劇が広がっていた。

「紫織！」

「救護班！ 急げ！」

紫織が頭から血を流して倒れている。

TEAMのバスターたちは義臣の視線一つで、次々と動き出していた。

「氷堂、翡翠はどうした？」

「すみません、社長！ 私がつかつでした！ 翡翠を人質役に使っていたので！」

氷堂は頭を下げる。

しかし、義臣はそれを責めなかった。

「いや、お前の術は決して翡翠を動かせないものじゃない。あいつの実力なら一分で快達に合流できたはずだ」

何も話していないのに、義臣は現場一つ見ただけで全て把握していた。

「父さん！ 俺が！」

「お前たちは心配せずに紫織の傍にいろ。」

翡翠の方は俺たちが責任を持って取り戻す」

「だけど！」

「快！ これは命令だ。」

バスターにとって隊長命令は絶対だと教えたはずだ。

氷堂、お前はすぐに調査に当たれ。

おそらくこの術はあいつだ」

それだけで氷堂はバスターの表情へと変わった。

そして、瞬新で消えたのである。

「時枝に連絡は入れたか？」

「はい！ いつでもいけるとのことです」

さつきまで説教をしていた智子も、優秀な秘書と化していた。これが「TEAM」だ。

「よし、全員に言っとけ」

義臣は全てを威圧する力を解き放つ。

「うちに喧嘩を売った馬鹿どもに容赦はするな。
『ブラッド』を全力で叩く！」

快達はただ見ているしかなかった・・・

第十五話：TEAM総力戦（後書き）

旅行に出かけていたので更新が遅くなりました。
ですが、今回もこのコーナーにいつてみましょう！

『篠原 夢乃』（シノハラ ユメノ）

快の母親で掃除屋界の絶世の美女！治療系バスターとしての実力
もかなりのものだ。

ただし、義臣はあまり戦線に夢乃を出すことが好きではないらし
い……

翡翠たち女の子には息子の快以上に甘く、すでに花嫁衣裳まで作
っている始末。

しかし、快はそれについては全く文句を言っていないようだ。

第十六話：戦う決意

「白真は紫織の傍から離れようとしなない」。
それが義臣の防御策だった。

ただし、自分の息子は思っていたよりも行動的で、
思っていたよりもバスターとしての血が騒いでいたのだ。

「快、とりあえず紫織は一命を取り留めたようだ」
「そうか、よかった」

翔が快達に告げに来た。
しかし、快はあまりホッとしていないようだ。
自分の仲間の翡翠は、まだ見つからないのだから……

「お前、さっきから何してるんだよ」

いくつもの書類を引っ張り出して、
快はなにやら調べ物をしている。
それに便乗するかのように、
掃除屋リストを修もパソコンで検索していた。

「調べてるんだ。翡翠をさらった『ブラッド』って奴等を」

「なっ！ お前、おじさんから言われただろ！

『絶対動くな』って！」

「翡翠がさらわれてるんだぞ！ 仲間なのに黙ってみてられるか！」

それは修も同じだった。
だからこそ快を手伝っていたのだ。

「あの縄、力を送ればどんどん締まるような術をかけていた。そんな高度な術、一端のバスターにできるわけがないんだ。少なくとも、親父レベルだ」

「だったらなおさら！」

「無駄だよ、翔」

白真もやってきた。

そして、片っ端からファイルを見ていく。

「紫織もやられてるんだ。

おじさんがなんと言おうと、俺たちも戦線に加わる。だけど、足手まといになるつもりもない。

だから快ちゃんも調べてるんだろ、奴らのこと」

そのとおりだった。

しかし、翔は反対する。

「それでも俺は反対だ。

下手したら俺たちがやられるんだぞ」

「やられないよ。俺たちは『TEAM』なんだ。翡翠を取り戻すためなら絶対死なない」

そして快はひとつのファイルを机の上に置いた。

それは「ブラッド」の本社だった。

少なくとも、この掃除屋の土地より広い。

「翡翠はおそらくここにいる」

快が指差したのは廃墟となってる倉庫だった。

「相手も『TEAM』が来ると分かっている人質を本部内に入れたりはしない。」

仮に入れたとしても、内部での戦いはこっちのほうが確実に有利だ。

父さんが来ることだって予測してるんだろうからな。

万が一本部が崩壊した場合、掃除屋としての機能が戻るのにも時間がかかるし」

「なるほど。だったら、ある程度の広さを持つ場所に翡翠を置いて、そこでおじさんを始末しようって魂胆もありそうだな。結界とかも張ってそうだし」

修は「ブラッド社員名簿」を見つけ出した。

どいつも猛者ばかりで、並みの使い手など皆無に等しそうだ。

「だが、侵入法はどうする？」

赤外線が多数外に張り巡らされているぜ？」

「俺が切るよ」

翔が申し出た。

「俺の戦闘タイプなら問題ないだろう」

「……父さんに逆らうのか？」

「ああ、隊長命令は絶対だしな」

四人の覚悟は決まった。

全ては翡翠を助けるために……

第十七話：誘い込まれた者達

暗い暗い場所だった。

ブラッドの倉庫の中。

天窓から少しだけ光が差し込んでいて、ダンボールの匂いが立ち込めている。

鉄の柱に縄で縛られているが、目隠しはされていない。

翡翠は少しだけ涙を浮かべていた……

「ここか……」

自分の家から出るのは簡単だった。

誰にも気づかれずに出られる術を快は知っていたからだ。

「やっぱり赤外線が張り巡らされているな。」

翔、いけるか？」

快は翔に尋ねると、

「ああ、大丈夫だ。んじゃ、いくか！」

翔の髪が少しだけふわりと揺れると、猛烈な強風が辺りに吹き荒れだした。

「召喚！ 切裂！」

叫んだと同時に死神が出現し、赤外線をすべて切裂いていく！

翔が得意とする召喚の一つだった。
そしてさらに叫ぶ。

「出て来い！ 風木霊！」

次に飛び出したのは、小さな白い鼠のような生き物。
ルビーの目が輝き、竜巻を所々に起こし始めた。

「火事だ！ 早く消せ！」

「電信柱が倒れたぞ！ 電気の復旧を急げ！」

「侵入者はどこだ！ 早く殺せ！」

ブラッド内は一気に騒がしくなった。

「殺せとは穏やかじゃねえな。
だが、やられる前にこつちがやる！」

快と白真はブラッドの敷地内に姿を現した。
それを見て、血気盛んな者達は、

「あのガキどもか！ 撃て！ 殺せ！」

怒声とともに、無数の銃弾が快達に撃ちこまれたが、

「効かないよ、おじさんたち」
「なっ！ 鉄を召喚しただと！」

快が召喚した鉄壁は、銃弾をすべて吸い込んでいた。

「今撃ったもの、すべて返してやる」

その言葉を合図に、二人に向けられたものはすべて返された。

その頃……

「こっちで間違いないのか？」

「ああ、翡翠も人質役様になってきたもんだ。
プラーナ（気）を発しているようだしな」

普段の遊びは、こんなところで生かされてきた。
だがそのおかげで、紫織は翡翠がさらわれる現場を偶然目撃し、
怪我をする羽目になったのだ……

「とにかく、翡翠を助けたら早く帰ったほうがいい。
瞬間移動なんて芸当は俺と快しか出来ないんだからよ」

修は少しだけ焦りを感じながらいった。
二手に分かれればそれだけ戦力は落ちるが、
敵の分散と脱出にはもってこいだ。
これが二手に分かれた理由だった。
あくまでも死んでしまつては意味がない。
快は敵地に取り込んで、そこだけは冷静だった。

「だけど、快はこっちに合流してきそうだ。
外がやけに静かになったと思わないか？」
「静かに……？」

修は最悪のパターンに陥ったことによやく気づいた。

「翔！ 飛ばせ！ 敵は俺達の方に集中してる！」
「その通り」

ブラッドの幹部達は、二人を取り囲んでいた。

第十八話：侵入者

ブラッド本社。

そこにいたのは快達だけではなかった。暗い暗室にほんのり灯る明かりの中に、一人で侵入したものがいたのである。

「動くな！」

その暗室の主は、首筋に冷たい刃が当たるのを感じた。そしてその侵入者の名を言ったのである。

「何年ぶりだ？ 篠原義臣……」

低い男の声。

葉巻を持った手が男の顔に少し明かりをともした。左目に付いた斬傷。

それはかつて義臣がつけたものだった……

「さすがに覚えてねえな。

だが、一体何のつもりだ？

うちの風野翡翠を誘拐するなんてよ」

いきなり本題に入った。

多少なりとも、義臣は焦っていたのだ。

さつきから感じていた嫌な予感が現実になりそうで……

「知らんな。そんな指令を出した覚えなどない」

「そうか。ならば今回の俺達の標的名だけを言え。」

それぐらいは知っているだろう？」

さらに首筋に刃が近づけられる。

しかし、男はにやりと笑い、

「それも教えるつもりはない。

かつてのお前になら教えてやったかもしれんがな」

「そうか、ならば仕方がない」

次の瞬間、暗室が一気に吹き飛んだ！

「宣戦布告だ。俺を本気にさせた報いを受ける！」

「・・・・くっ！ はははははは！！！」

男は高笑いを上げる。

「大いに結構だ！ だが、急いだ方がいいだろうな。

お前の焦りの元凶達はすでに我が本社に攻め込んでいる。
そこには幹部を配置しておいた。

さすがの『TEAM』もおしまいだ・・・・！！」

すべてを言い終わる前に義臣は男の喉下を切り裂いた！

そして、男はさらさらと砂になる。

「ダミーにもう用はねえよ。

氷堂、智子！」

「はっ！」

二人の幹部が姿を現した。

「お前達は快のところへ行け！

俺はあの馬鹿を追いかける！」

「社長！ あいつのところへは俺が……！」

二人は義臣の空気に完全に威圧された！

目を見てしまえば間違いなく動けなくなる。

「お前の親父は半端なく強い。

やれるのは俺だけだ。

お前の気持ちはわからないこともないが、

今は快達のところへ行き翡翠を取り戻すのが任務だ。
だから行け！」

その言葉と同時に、二人は一気に消えた。

「さて、氷堂尊氏はどこにいる……」

義臣は全神経を集中させた。

そして気づいたのである。

「……！！ あの野郎……！」

義臣はすぐさまその場から消えた。

最悪な事態は、刻々と迫っていたのである……

第十九話：津波

「がはっ！」

「翔！」

ブラッドの幹部数十人に囲まれていた修と翔は、自分たちの力全てを使い切っていた。修の時空魔法で逃げ切りたかったが、それをさせない速さが目の敵の特技らしい。

「おいおい、もうくたばったのか？」

TEAMのガキだったらもう少し位楽しませてくれよ」

首根っこを筋肉質の男に持ち上げられたが、翔は反抗した目を決して崩さなかった。それを見て、卑下された笑いが二人の空間に立ち込める。

「手を出してはいけない」。

そんなことは分かっていた。

子供ながらにも「ブラッド」の名は脅威の存在だと知っていたから。

だがそんなことより、翡翠が無事なことだけを願っていた。だからこそ、最後まで反抗したかったのである。命乞いをして死ぬことだけはしたくなかった。

「可愛そうなことしてやるなよ。」

一思いに殺してやりな」

「殺し屋の癖して母性本能でも働いてるのか？」

さらにこの空間は笑いに包まれる。

「やるならやれよ。こっちはプロのバスターとしての誇りがあるんだ。」

てめえらみたいなカスに情けなんか掛けられても嬉かねえんだよ！」

血の混ざった唾を翔は男の顔に吐く。

その態度に周りは笑い出すが、首根っこをつかんでいた男は激怒した！

「クソガキが！」

手に鋭い刃が召喚される。

水を滴らせているあたり、

この男は「水」を扱う剣士なんだと理解できた。

「そんなに死にたければ今すぐ楽にしてやる！」

「やらせるか！」

修が男に体当たりした！

そしてその体勢が崩れたところで翔も男の顔に蹴りを一発入れる！

「すまない、修」

「礼は後だ。とにかく、ここから逃げることを考える。」

援軍なんて絶対来ないんだからよ！」

「そのようだな」

男は立ち上がる。

そして二人は最悪の光景を見た。

男が召喚した剣に、水がまるで生き物かのようにうごめいてる。

「俺も遊びには疲れた。後二人侵入者もいたようだしな。そいつらに期待するでしょう……」

そして切っ先をスッと二人に向ける。

「終わりだ」

「うわあああ……」

二人は真正面からその攻撃を受けた！
流れ出る大量の血が彼らの死を物語っていた……
だが、本当の悪夢はここから始まったのだ。

「幻術はこの程度でいいか？」
「なっ！」

そこには水でずぶ濡れになった二人を抱えている男がいた。

「うちの息子たちが随分と世話になったな、猿柿さんよ」

二人を殺したはずだった男は自分の名前を呼ばれ青ざめる。
それは周りにいた幹部たちもだ。

「と……と……時枝脩三……」
「何だつて！」

そこにいたのは、黒ずくめの格好をした、
時枝警視總監こと、時枝脩三が立っていた。

「水が好きなようだな」

にやりと笑ったその顔は、とても温厚な父親だとは思えない。

「命だけは．．．！！」

「そうだな。だが．．．」

大量の水がこの空間に召喚される。

そしてそれは津波のようなうねりを上げて幹部たちに襲い掛かった！

「この空間から消える．．．！！」

声もなく、幹部たちは津波に飲まれたのである．．．

第二十話：対峙

「快ちゃん！ 修ちゃんたちは大丈夫なのか？」

「ああ、時枝のおじさんが行ってくれてる。

俺達は翡翠のところへ急ぐんだ！」

確実に近づいてくる翡翠のいる倉庫。

翡翠が確実に生きていることは感じている。

それと同時に、恐ろしい力も近づいていると感じていた。

「白、倉庫内に入ったらすぐに翡翠を連れて脱出だ。
手を出したら負けだと思え」

「うん、あいつらのファイル見ただけで分かったよ。

TEAMと互角に戦える掃除屋が存在してたなんて思いたくもなかったけど……」

「氷堂尊氏」の名前が二人には浮かんでいた。

ブラッド本社の社長で、その力は義臣でさえ苦戦するかもしれない相手だ。

自分たちが到底かなわないと自覚するしかなかった。

「あそこか！ 急げ！」

快と白真は倉庫の扉を蹴破り、柱に括り付けられた翡翠を発見した。

「翡翠！」

「快ちゃん！ 白ちゃん！」

ようやく出会えた。

ようやく助けに来てくれた仲間に翡翠は涙を流した。

「待ってる！　すぐにこのロープ切ってやるからな！」

腰から取り出したナイフで、快はロープを断ち切る。

「よし！　すぐにここから……！」

空気が威圧された。

体の力が全て抜けた。

動けないことだけが確かになった。

そして聞こえた低い声……

「ようこそ、篠原快。会ってみたかったよ」

そこに登場したのは、氷堂尊氏だった。

「氷……堂……！」

声が自分でもよく出たと思った。

恐怖なんて言葉でこの男を表現してはいけない。

生々しい左目の傷に黒ずくめの格好、

そして靴に光る金装飾が自分を呪い殺してしまいそうだ。

「ほう、やはりちゃんと調べることは調べてきたようだな。
父親に似て優秀なようだ」

笑みが翡翠の涙を誘った。

自分を攫い、紫織に傷覆わせた男。

それは間違いなく目の前にいる男だ。

「快……ちゃん……！ 時空魔法で飛んで！
早く皆のところへ！」

「！！」

翡翠の言葉で目が覚めた。

快は翡翠と白真を引き寄せ、その場から飛ばうとしたが、

「なっ！」

飛ぶことが出来ない。

それ以前に魔法がうまく使えない！

「まだ帰っていいとは言っていないだろう？」

私は君たちを殺すつもりはないよ。

これからの掃除屋界でも新しい力が必要だ。

だが、返答しだいでは命を握ってやるつもりだが……」

脅しではない！

それだけが事実だった……

第二十一話：救援

一分経ったかも怪しいというのに、すでに五時間はその場にいた気がした。

「いったい何を要求しようと言った？」

快はあくまでも冷静を装うと必死だった。隙をくれてやるわけにはいかない。

一瞬の言動が仲間の命まで奪ってしまう。それだけは肝に銘じておけと言われていたから……

「ほう、やはり義臣の教育は行き届いているようだ。いや、どちらかといえば夢乃に似ているか」

氷堂尊氏は微笑を浮かべた。

「何、ガキに対して難しい要求はしない。

風野博士、つまり翡翠、

君の父親の研究データをこちらに提供してほしいだけだ。義臣が反対するなら盗んできてくれても構わん」

翡翠の父親は科学者だ。

その研究内容は快達にも知らされていなかった。しかし、目の前にいるこの男が、

利用価値あるもの以外を欲しがることなどないだろう。

「研究内容を教えてくれないか？」

科学者ならいくらでも論文を書いてるだろう？」

賭けだった。

どのような反応を示すかの……

「そうだな、確かに知らなければ持つてはこれないだろう。

『サイボーグ』とでも言えばわかるか？」

「サイボーグ？ もう少し詳しく聞かせてくれないか？」

快はある程度の企みを理解していた。

おそらく、「戦力の増強」が狙いだろう。

「ああ、風野博士はこの掃除屋世界ではかなりの功労者でね。

多くの殺戮兵器を生み出してきたんだ」

「えっ？」

翡翠にとってそれは初耳だった。

自分の父親がそんなものを作っていたことなど知らなかったからだ。

「事実、私のこの左目の傷も風野博士がつけたと同じものだよ。

あの兵器を義臣が使ったことで私は視力を失った」

「父さんが……？」

快はひとつ鼓動が強く打ったのを感じられた。

「だが、やはり風野博士は甘い人物だった。

戦いにおいて視力を失ったものに、仮の目を作り出した。

しかし、その目がただの目になるはずがなくてね。

殺戮兵器としての目が出来上がったわけだ」

話が見えてこなくなった。

自分の目を治すためなら、ブラッドの科学班にでも出来たはずだ。それをわざわざ翡翠の父親の力を借りたいと何故に言うのだろう？

「その発明品の名は「デビル・アイ」。

掃除屋界を滅ぼすこともできる代物だ。

私はそれを手に入れたいのだ。

義臣を滅ぼす力をな！」

「うっ！！」

三人はついに立てなくなった。

覇気が三人の感覚を全て麻痺させたのだ。

『動け……！』

心の中で快は叫ぶが、指一本たりとも動かすことができない。

「さあ、これで私の話は終わりだ。

もちろん引き受けてくれるだろう？」

さらなる恐怖が自分たちを支配していく。

このまま頷いてしまえば簡単だと分かっているのに、それが出来ない。

「どうするんだ？」

再度たずねられたその時、

「もちろん答えは決まってる」

屋根の上から二つの影が降りてきた。

「あっ！」

救援が駆けつけてきたのだ。

「『NO』だ！ 兵藤尊氏！」

息子の氷堂仁と智子だった。

第二十二話：激闘

TEAM本社。

柔らかな日差しが届く救護室で眠っていた紫織に、やさしい美女が視界に飛び込んできたのである。

「ごめんね紫織ちゃん。白ちゃんの家を病院にいつていたから、痛みが少し長く続いちゃったわね」

やんわりとした口調で、申し訳なさそうに夢乃は謝った。

「ごめんなさい、夢乃さん」

「どうして？ 紫織ちゃんが謝る必要はないわ」

さらさらとした紫織の髪を指で梳かしてやると、紫織は涙を浮かべて答えた。

「だって、私が翡翠を助けられなかったから、翡翠が捕まっちゃったのでしょう！」

それに対して夢乃は首を横に振った。

「それは違うわ。それに大丈夫。」

私も今から戦線に出るから、紫織ちゃんはゆっくり眠っていてね」
「えっ！ だけど夢乃さん！」

止める前に、夢乃は姿を消した。

紫織の頭の怪我を完全に治して・・・

その頃ブラッド本社では・・・

「ほう、これはこれは、TEAMに逃げ込んだ馬鹿息子の仁と智子殿じゃないか」

癪に障る言い方を尊氏は選んだ。

そのほうが面白いといわんばかりに・・・

「今度はその目だけじゃなく、口まで消してやろうか？」

仁は殺気を放った。

智子はまったく相手にせず、快たちを逃がす方法を考えている。

二人相手でも、この目の前にいる男にかなうかどうかは疑わしい。

「随分口も悪くなったな。義臣の影響か？」

「残念、社長は普段はだれているんでね、

素行の悪さはあんた譲りだと思えよ！」

快達は初めて本気の仁を目の当たりにした。

これがあの優しい氷堂さんだとは思えなかった。

「そうか。ならばその親としてやらねばならないことは一つだけだ」

手に光が集中し始める。

間違いない危険な！

「お前を葬り去る！」

「やらせるか！」

衝撃が鼓膜を突き破ろうとするのを感じた！
速く、何も見えない！

これが達人といわれるバスターの本気だ！

「快ちゃん、この場から決して動かないでね」

「智子さん？」

智子は結界を張ると、衝撃の中に飛び込んだ。

「氷堂尊氏！ 掃除屋界の危険因子としてお前をつぶす！！」

智子の手に雷光が走る！

「喰らえ！」

手から放たれた雷光は尊氏の残像を消し、
さらに本体を追いかけた！

「ちっ！」

尊氏も仁の行動と智子の攻撃を見ながら、
確実に二人をしとめる戦略を練り始める。
それだけの余裕があったのだ。

「快ちゃん……」

白真の呟きに快は耳を澄ませる。

「このままじゃ二人とも殺される……！！」

それは快自身も感じていたことだった・・・

第二十三話：覚醒

嫌な予感なんてものは、バスターをしている以上必ず身につくもの。

それがプロになればなるほど、感覚は研ぎ澄まされていく。その力が非常に高いものがここにいるならなおさらだ……

「快ちゃん……？」

さつきから快の力が膨れ上がってきている。

間違いなく目の前の戦いに触発されているからだろう。

しかし、智子が張った強力な結界を崩すことはまだ出来ないようだ。

「さて、そろそろとどめといくか」

尊氏の低い声が二人のバスターに届いた。

そして次の瞬間！

「なっ！！」

「ああっ！！」

二人の血が大量に噴出した！！

尊氏が何の攻撃もしていないのにもかかわらずだ！！

「いやあああ！！！！」

「翡翠！！」

白真はその惨劇を見せまいと翡翠を抱え込む。

上出来の措置だった。

「氷堂……！！！」

口からも血が滴り落ちていく。

それは自分が死ぬことを理解するのには十分すぎるほどの量だ。

「さて、これでお前たちは後数分もほっておけば死ぬだろう。
だが、その前に後悔の一つはさせてやろうか」

尊氏の視線の先に見えるのは快達。

「やめ……！！！」

「止めはせんよ。さつきからあのガキの放つ殺気が尋常じゃなくな
ってきてね。

今のうちに殺しておかねば義臣を二人作ることにもなりかねんか
らな」

そして尊氏は結界へ近づいていく。

「実に残念だよ。だが、風野博士の兵器は他の手段で手に入れるこ
とにしよう。

さようなら、ガキども！」

破滅の力が快達に襲いかかろうとしたが、
それを仁が相殺する！！

「手を出すな……！！！」

精一杯の力で仁は睨み付けた。

少しでも時間を稼げば、きっと救援が着てくれると思ったからだ。

「生意気な息子だ」

「当たり前だろう？」

それは刹那！

尊氏の胸に斬撃が入る！

「くっ！！」

よろめいたその隙を突いて、快は尊氏の後頭部に蹴りを喰らわす！
そして翡翠達の前に立ち、尊氏を睨み付けた！
その目は明らかにキレていた！
まるで義臣のような目をした子供だった。

「氷堂尊氏、お前を抹殺する！」

その言葉が冷たい空気につた・・・

第二十四話：血

人を斬ったのは初めての経験だった。

いつもはここまで死闘を演じることなかったから。

だけど今ここで戦わなければならないと幼心に思った。

大切な人が全て消えてしまふと思ったから……

「義臣……」

尊氏は快を見てそうつぶやいた。

もちろん義臣にはまだ遠く及ぶ戦闘能力ではない。

さっきの攻撃で手を休めるほど義臣は甘くない。

しかし、目の前にいる八歳の少年からは、

義臣と同じ気迫を感じる。

いや、それ以上か……

「快だ……」

「ん？」

翡翠と白真に強力な結界をはり、

そして叫んだ！

「俺は篠原快だ！ 父さんと一緒にすんな！」

突撃してきたスピードは氷堂がよけるのに精一杯になった！

小さい分だけ、攻撃が当たる面積が少ない。

その小さな体が最大の防御になっている。

「召喚！ 切裂！」

死神が再度登場する！

本来なら侵入のために使う召喚術も、
一つ使い方を変えれば殺人の魔法になる。
それを快はためらうこともなくやってのけた。

「ちっ！」

死神の斧を簡単に受け止め、
その姿を一瞬のうちに消し去る。
しかし、快はその一瞬で氷堂の懐に入り込んでいた。

「終わりだ」

腹部に刺さる剣が血を滴らせる。
それを見ていた翡翠と白真は、
喜びよりも恐怖を感じていた。

「白ちゃん・・・快ちゃんじゃないよ・・・」

いつも冷静沈着、誰よりも仲間思い。
そして翡翠をからかうあの表情が全て消えてしまいそうだ。

「翡翠、快ちゃんを止めてくる」

「白ちゃん！ ダメだよ！」

翡翠は白真の腕を力いっぱい握り締めた。
出ていけば白真が殺される！

「いいんだ！ 快ちゃんがこのままじゃだめになる！」

そして白真は結界を破り、外に飛び出した瞬間、

「白！ 出てくんな！！」

その声は遅かった。

声もないまま、白真は血を噴出して倒れたのである。

「いやああああ！！！！ 白ちゃん！！！！」

翡翠もその場から出ようとしたが、

快がそれをさせない！

「出るな！ 外は全て剣だと思え！

出た瞬間に空気の刃に指されて死ぬぞ！！」

それが仁や智子がやられた理由だった。

尊氏が周囲全てを空気の刃に変えたのである。

快はそれを押し返す力を発しながら戦っていた。

だが、冷静さを失った快は、そのことを二人に伝えずに戦い始めたのである。

「そのとおり。だが・・・」

快が振り返ったとき、快の胸は斬り付けられた！

「快！！！！」

結界は張っていてもかかってきた血。
それは快のもの。

「気を抜いても同じことだ。お前は死ぬ」

ゆっくり快は倒れていく。

それは分身でもなく本体……

「これで終わりだ。残念だったな、篠原快」

剣についた血を振り払う。

それが間違いだった。

「……………なっ!!」

体の自由が利かない。

感覚がない。

声を発することが出来ない！

「……………あっ!!」

涙を流した目に映った女がいた。

「夢乃さん!!」

救援は現れたのだった。

第二十五話：治療兵

「ぐあっ！」

悲痛な叫び声は氷堂尊氏のもの。

そしてさらさらと砂になって彼は消えていった。
倒したのは篠原義臣だ。

「これで全部か」

顔に切り傷を一つつけた義臣は、
救援に向かった社員の顔を見て少しだけ安堵した。

「すみません社長！」

「いや、気にするな。救援が遅くなって悪かった」

これで全てが終わっていればにっこり笑うところだったが、
今回はそうはいかない。

すでに義臣は十数体の氷堂尊氏と戦っていた。

それはブラッドに潜入したTEAMの小隊だけならよかったのだが、

よりによって別任務についていた者たちにまで被害が及んでいた
のである。

「社長！ こっちのことは気にせず、早く快ちゃんたちの元へ行つ
てください！」

それにこの力は間違いなく……」

「ああ、夢乃だ。動くなといっておいたのに……」

そして義臣は遠く離れたブラッド本社に飛んでいくのだった・・・

その頃、氷堂尊氏と夢乃は向き合っていた。

プロのバスターとしての殺気は、とても常人が立っていられるものではない。

『血の枷か・・・さすがは医療兵だ』

快の血を振り払ったとき、それを瞬時に夢乃は操った。
少しでも治療する時間を設けるためだ。

「翡翠ちゃん、白ちゃんと智子さんの治療を任せたわ。

二人とも傷は浅いから」

「うん」

涙を流しながら翡翠はうなずいた。

『快は傷口をふさげばギリギリか・・・。それより氷堂君を・・・』

そして氷堂の元に夢乃は向かい、すぐに治療を始める。
そのスピードは夢乃の最速だった。

しかし、一分もしなうちに、血の枷は破られる。
さすがに向き合わなければいけなくなった。

「久しぶりだな、夢乃」

「ええ、何年ぶりかしら」

月馴染みの言葉を交わすものの、お互いに相手の出方を伺っている。

「随分といい女になったな。」

それにいい息子も育てたもんだ。

俺を斬りつけた奴も久しぶりでね」

尊氏は笑う。

「そう、だけど治療の邪魔になる。」

とつと消えてくれないかしら？

私とやりあっても、勝てる気がしないでしょう？

それに、義臣がもうすぐここに来るみたいだしね」

精一杯の覇気を尊氏に叩きつける！

急がなければ全員危険な状態になることは目に見えていた。

特に氷堂は全ての力を使い切っているせいで危篤状態だ。

戦っている暇などない。

「そうだな。だが……」

澄んだ金属音が響き渡る！

尊氏が快の命を奪おうと襲い掛かってきたのだ！

「くっ！」

持っていたナイフで夢乃は受け止めた。

しかし、戦闘に集中すれば全員の治療にかけられる力が少なくなる。

「息子の命は捨てていけ。」

そいつは生かしておくわけにはいかない。

お前と義臣の子供など危険すぎる。

風野博士の研究結果では……!!」

「ふざけるな!! 快は私たちの大切な子供だ!!」

たとえ私の命を犠牲にしたとしても絶対守る!!」

夢乃は怒りを爆発させた!!

そして一気に力を爆発させる!!

数分間の勝負だ。

その間にこの男を殺せばいい。

そうすれば全員の命を救うことができる!

「くたばるがいい! 水龍!!」

巨大な水龍を夢乃は召喚すると、

「かかったな」

「何!!」

水龍が自分のほうに襲い掛かってくる!

「操作させてもらったよ。」

そこで全員溺れ死ぬがいい」

「しまった!!」

倉庫が完全に消滅した……

第二十六話：任務未完

目が覚めたら朝だった。

自分のベットの上。

そして傍にいてくれたのは自分の父親の義臣だ。

今日は顔に絆創膏一つ。

しかし、それがおかしくないのはこの男の人柄のせいだろう。

「とうさん……」

朦朧とする意識の中で快は呼びかけた。

「よう、目が覚めたか？」

いつもと変わらない声。

しかし、すぐに快は覚醒した。

「父さん！　いてて！」

昨日受けた傷が痛む。

とても起き上がることなど無理だ。

「無茶すんな。夢乃さんが大きな怪我だけは治してくれたが、完治とまではいかないらしいからな。」

それと全員命だけは助かった。夢乃さんに感謝しろよ」

そして快を再び寝せた。

それから少しだけ沈黙が流れた後、快は謝罪した。

「父さん、ゴメン……」

「ああ、大事な戦力を危険にさらした罪は重いな。どうやって責任とる？」

快は答えることは出来なかった。

ただ翡翠を助けたいがために自分は動いたのだから……

「快、お前が戦おうとした相手は掃除屋を潰す掃除屋だ。

まだガキのお前達が手を出していい相手なんかじゃねえんだよ」

言葉の一つ一つが快の心に刺さっていく。

「それにだ、お前達は「TEAM」の看板を背負って戦うんだ。

お前の浅はかな考えが今回の事件を引き起こしたなら、

お前はバスターになる資格などない。

そして覚えておけ。お前達はいつも死と隣り合わせにある。

一人の行動が仲間を殺すことにもなるってな」

快は泣きそうになるのを必死にこらえた。

しかし、義臣はそれ以上責めることはしない。

さらりとした黒髪を撫でながら言った。

「だが、仲間を思う気持ちは隊長として合格点だ。

そのうち母さんがおかゆ作って持ってくる。

お前の弟が腹の中にいるってことも忘れるな」

そう言っただけで快の部屋から出たあと、

快は布団の中で声をあげて泣いたのである……

それから約一時間後……

「快ちゃん、お粥持ってきたよ」

優しい母親はいつもの笑顔でやってきた。

快の泣き腫らした目を見ても何も言わないが、

それが彼女の優しさであった。

「ありがとう・・・母さん、父さんに怒られた？」

「うん、怒られちゃったわね。」

快の弟が殺されちゃうかもしれないのに、前線に立つちゃったでしょ」

笑いながら夢乃はいう。そしておかゆをレンゲですくい、

「はい、快ちゃん！ あゝんして！」

いつも以上に楽しそうな母親。

義臣がいたら間違いなく怒られていただろうが、

今回ばかりは甘えることにした。

そしてお粥をかみしめながら、夢乃は話してくれる。

「本当、みんなが無事でよかった。

それが一番嬉しかったのよ。

それに快ちゃん、みんなにお礼言っておいてね。

助けてくれたのは「TEAM」の皆なんだから」

水龍が倉庫を破壊する直前、

TEAMのメンバーは間一髪のところまで全員を運び出したのである。

しかし、氷堂尊氏の姿は、それから八年間現れることはなかった。

•
•
•

第二十七話：任務再開

最後の晚餐が終われば、任務まで数時間ある。

その間少しでも睡眠をとっておくのがプロというもの。

眠れない日が続く可能性もあるというならなおさらのこと。

しかし、快が自分の部屋に戻ればやっぱりいた。

翡翠だ……

「おい、なに人のベッドに寝てんだよ！

俺はこれから数時間眠りたいんだよ！」

自分のベッドですやすやと眠っている翡翠を、

襟首を掴んでポンとやわらかいソファアの上に投げる。

そしていかにも寝ぼけた面を見せて言うのだ。

「おはよう、快」

「まったく、年頃の娘が人の部屋で寝るなってんだ！」

「だって、快のベッドはお日様の匂いがするんだもん」

春の日差しは特に気持ちいい。

快の部屋にはお日様がいっぱい差し込むのだ。

「とにかく寝るなら自分の部屋で寝ろ。

医療パックはその辺に置いとけ」

任務の前に翡翠はお手製の医療パックを渡しに来る。

それが治療兵としての仕事だ。

「快」

「何だ？」

ベッドに入りながら答える。

「ちゃんと帰ってくるよね？」

また大怪我しないよね？」

それに・・・遊びに行くんでしょう？」

翡翠はさすがに不安でいっぱいだった。

あの幼いとき、自分たちを恐怖に陥れた相手と戦いに行くのだ。それも今回はほとんど救援なしで・・・

「・・・道に迷いはしない。」

怪我すりやお前が治療すればいい。

パフェはおごってやるから心配すんな。

それぐらいの約束は守るからよ」

それだけ告げて快は眠りに入ってしまった。

これ以上は起こすわけにはいかない。

任務成功率を上げるのも治療兵の役目。

何も言わず、翡翠は快の部屋から出て行った・・・

そして数時間後・・・

「それじゃ、いつてくる」

「おう、死んでくるな」

義臣にそう告げた後、快は仲間の元へと行く。

「隊長、こっちは準備OKだ」

翔、修、白真に迷いはない。
戦いの準備は完全に整った。

「そうか。だったら行くぜ、標的は「氷堂尊氏」。
ブラッドの解体に行く!!」

闇夜の中を、四つの影が動き出した・・・

第二十七話：任務再開（後書き）

いよいよ現在です。ここからの「TEAM」の活躍にご期待ください

第二十八話：戦火

「失礼します」

ブラッド本社社長室。

相変わらず暗い部屋に氷堂尊氏の姿はあった。
しかし、何の反応も見せない。

「本日未明、TEAMがこちらに向けてバスターを派遣。
人数は四名、援軍の可能性は低いとのことです」

ブラッドの社員は、それだけ告げて部屋を後にした。

「……篠原快か」

僅かばかり口元が吊り上った。

「やっぱりブラッドは遠いな」

屋根の上を走りながら白真は言う。

もちろん時空魔法で飛んでいけばいいのだが、
それでは魔力の無駄遣いになってしまう。

氷堂尊氏と戦うためには、
少しの力も惜しいのだ。

「仕方がないだろう。俺たちが昔ブラッド本社を壊すきっかけを作ったんだ。

なにより、あそこまで大破した場所を使うほど貧乏でもないだろ

うし」

快は冷静な声で答えた。

八年前、TEAMの近くにあったブラッド本社は、建物と土地がほぼ使い物にならなくなっていた。掃除屋としては、そんな場所で商いをする訳にもいかないのだ。

「だけど、造りはほとんど変わってなかったな。同じような侵入方法でいけそうだし」

幸か不幸か、ブラッドの本社そのものはそう変わっていなかった。事前に入手していた本社の見取り図も、それほど頭に叩き込む必要もなかったほどにだ。

「おい、白。あまり油断するなよ。」

うちの馬鹿親父でさえ戦闘スキルは落ちちゃいないんだ。ブラッドの幹部たちならその辺の鍛錬は怠ってるわけがないからな」

快はそう告げるが、白真は勝気な声で答えた。

「大丈夫だよ、快ちゃん。」

なんだか今回は負ける気がしないんだ。だから絶対勝てるんだよ」

決して根拠があるわけではない。

しかし、それは誰もが感じていたことだった。

ブラッドの幹部たちには悪夢を見せられた修と翔でもだ。

「そうか、だったら一気に飛ばすぞ」

四人はさらにペースを上げた。

その頃、TEAM本社でも一つの動きがあった。

「夢乃さん、そろそろ時間だ」

「はい、社長。お任せください」

夢乃はきりつとした声で答えた。

そして彼女が見下ろしているのはブラッド本社。彼女の隊には氷堂仁と智子の姿もあった。

「俺たちも援護に回る時代がやってきたんですね」

氷堂は微笑んと言う。

あの小さかった快たちを思い出しながら……

「そうね。けどあの子達は今や重要な戦力だもの。私たち以上にいい仕事をしてくれるわ」

夢乃はにつこり笑う。

そして再びブラッド本社を見下ろすと、

「快チームを援護する！

侵入経路確保、および救護活動に我々は当たる！

幹部各位には一切手出し無用！

以上だ！」

その命令とともに、ブラッド本社に戦火が上がった。

第二十九話：突入

快達がブラッド本社についたのは、
夢乃たちが突入した二十分後だった。

火の手が上がっているあたり、
すっかり流れはこつちのものになっている。

「さすが夢乃さんチーム！
派手に荒らしてくれてる！」

白真は感心の声を上げた。

「当たり前だ。うちでも一・二を争うチームなんだ。
失敗するほうがおかしい」

しかし、まだ自分達が出るべきではないことはわかっていた。
ブラッド本社の光がすべて落とされた後に突入する手筈だ。
闇にまぎれたほうが、氷堂尊氏の下まで早くいける。

「あと十秒……」

修がボソリとつぶやいた。
それが近づくたびに鼓動がバクバクしてくる。
しかしそれは恐れじゃない。

「いくぞ！！」

電気がいっせいに落ちた！
四人はバラバラになり突入する！

「どけえ！！」

「ぐあっ！！」

消火活動に当たっていた社員達を、
快は次々と気絶させていく。

それに気づいた者は、すぐに対応しようとしたが、
快の速さについていけるものなどいはいはない！

「幹部達を終結させろ！ TEAMの本隊が突入してきた！！」

隊長格の男が指示を出したが、

「寝てる」

修が男の首を打ち気絶させる。

「幹部級は今度こそ俺が倒す。
昔の借りがあるんでね」

そう告げて修は本社に突入した。
目指す場所は一つだけ。

八年前、自分達を殺そうとしたあいつらのもと。
今なら対等、いや、それ以上に戦える！！

「そういうことだ。」

さつきから尾けてるんだろ。猿柿さんよ」

「ほう、俺を覚えていたのか。」

随分でかくなっただな、クソガキ」

オレンジ頭と体格のよさ、

そして怪力が自慢だというところは変わっていない。

八年前は自分の父親に恐れを抱いていた男は、

今はその息子と対峙している。

それも一片の恐怖もなくて。

「ああ、八年前の仕返しをしにきた。

今度は俺の剣の前にくたばれ！」

戦いは始まったのだ……

第三十話：圧勝

今まで負けた相手は快と白真、
そして自分の父親たち。

まだそれは認められる相手だとしても、
この目の前にいる男に負けたくはなかった。

「時枝脩三の息子がどこまで強くなったか……」

猿柿は相変わらず修を弱者としか見ていない。
だが、それも仕方のないことだ。

掃除屋界で常に騒がれているのは、
快や白真。自分はそのおまけみたいなものだ。

しかし、それはそれでよかった。
強くなっていることだけ分ければ……

「強くはなってるさ。どんな馬鹿でも、
体格がでくなればそれなりの攻撃力は得ることができる。
八年もあればなおさらだ」

抜いた剣に水が取り巻く。
修の魔力タイプは「水」。

自分の父親から、その遺伝はすっかり受け継いでいるらしい。

「ほう、時枝脩三と同じか。
だが、威力は比べ物にならない」
「……なめんなよ」

その瞬間、二人の力が激突した！

パワー自慢の猿柿は、いとも簡単に修の剣を受ける！

「甘いわひよっこが!!」

寸鉄が空間から現れ、修の頭部を狙ったが、修は回避し高く飛び上がると、

「時雨!!」

水の矢が猿柿に集中打を浴びせた。

「……きかな」

「だろうよ」

まるでその反応を読んでいたかのように、修は猿柿の背後に回りこみ、

「水波動砲!!!」

「ぐうつ!!!」

強力な水の砲弾を撃ち込む！

「くそ……!!」

立ち上がろうとした。しかし、動けない。何も自分の体にされたことなどないのだ。

「なさけねえ、俺はこんなやつに負けたのか」

修の声が静かに聞こえる。

そして猿柿の目に映ったものは巨大な津波・・・

「なっ！」

八年前と同じ、いやそれ以上の波の高さだ！

「お前は俺に威圧された。

だから動けないだけだ」

「馬鹿な！」

声は出るのに体だけ動かないことなどあるというのか！

「今度は俺の名に恐怖しろ」

そして放たれる巨大な津波。

叫び声も聞こえることなく、猿柿は飲み込まれたのだった・・・

第三十一話：平々凡々

片岡翔。

平々凡々の成績に容姿。

特に目立ったこともないが友人たちの信頼に厚い。

そんな人物が今世の中を賑わしている「TEAM」の、

篠原快たちと隊を組んでいることが疑問に思われることもしばしば。

だが、そんな彼だからこそやれることもある。

それは任務前日のこと……

「向こうの幹部に火の使い手がいる」

そして向けられた視線は翔へのもの。

「間違いなく翔に当たるな」

「うん、俺もそう思う」

修と白真はうなずきあった。

「だろうな。翔が昔暴れたとき、

切裂といい風木霊といい、

しかも幹部とやりあったときも風魔法だろ。

間違いなくお前が狙われる」

「なんか風しか能がないような言い方だな……」

快の冷静な判断は当たっているだけにきつい。

「だが、ある意味チャンスだ。

お前が風しか使えないと思い込んでいたら、少なくとも風タイプだと思っていれば、必ず相手に隙ができる。頼んだぜ、翔」

そして現在に至るのある・・・

「快の言うとおりだよ、まったく・・・」

翔は有能な隊長に、改めて感心するのだった。目の前にいる女は、火使いの幹部だったのだから。確か名前は・・・忘れているが・・・

「いらっしやい、ぼうや」

茶髪のロングヘアに真っ赤な口紅をつけた売れないキャバクラ嬢。

翔の第一印象はまさにそれだった。

甘ったるい声はしているものの、性格はどう見てもどぎつそうな女だ。

顔で分かるというのはあながち嘘ではないらしい。

「・・・ずいぶん老けたおばさんだな。バスター引退した方が良くないか？」

「残念。夢乃より若いから心配いらないわ」

子供の挑発という手には引つかからないらしいが、

「けど行き遅れだろ」

的を得ていた。

「……失礼な子。坊やのバスタータイプは？」

「自然系だな、一応」

あえて翔はそう答えた。

バスターにも大きく四つに分類される。

もつともスタンダードなのが武器を使う体術系。
換装士もこれに入る。

次に召喚系。さまざまなものを呼び出し戦うもの。
快がまさにこのタイプだ。

そして治療系。戦闘より回復にまわるバスター。
バスター界でも少ないタイプである。

最後が自然系。この世の自然というものを操るタイプだ。
ただし、この中でさらに火や水といったように分かれているので
ある。

「そう。だったら私と同じね。だけど水タイプではないでしょう？」
「……知ってるんじゃないか」

翔は臨戦態勢を整え始める。
それに女は笑みをうかべ、

「当たり前。相手の弱点に合わせた配置はされてる。
まあ、猿柿はやられたみたいだけど、
残りのメンバーはそうはいかない」

そして女は手に炎を練り出し始めると、

「自己紹介はしておくわ。

私は長野桃子」

「そうだったな。俺は片岡翔だ」

そして火と風は激突する。

第三十一話：平々凡々（後書き）

ランキングに登録してみました
おかげさまで出だし好調です！

この場を借りて御礼申し上げます。

「どうもありがとうございました、

これからも応援よろしく願いいたします！」

第三十二話：風使いの意地

風は火の威力を強くする。

この世の中の常識を覆したのが自分の父親。

「TEAM」の幹部である片岡航生。

だが、息子はいたって平々凡々。

そんな芸当はできるわけがないのである・・・

「風木霊!!」

「火炎!!」

風と火は激突する。

力はほぼ互角。

しかし、相性は最悪だ。

「あぶつ!!」

間一髪で翔は黒焦げを回避した。

風使いはスピードが命だ。

当然翔のスピードは速いほうである。

「ほらほら！ さつさと避けないと死ぬわよ！」

桃子が繰り出す炎弾を無駄な動きなく翔は避ける。

翔の動きのパターンはやはりブラッドの幹部だけあって心得ていた。

昔、自分を殺そうとした猿柿より強い。

いや、レベルそのものが違う。

それだけは確かだった。

「切り返すか……」

少し翔は桃子から距離をとると、
放たれた炎を一気に風の力で切り返した！

「火炎竜巻！」

今まで翔に放たれていた炎が、桃子に戻るが、

「あまい！」

さらに炎の威力をあげて翔に放たれる。

「おっと！」

それを避け、翔は一定の距離をとった。

「どのみち勝ち目はない！さつさと死になさい！」
「やだね。俺は平々凡々なりの意地があるからよ、
やっぱり負けるわけにはいかない」

そして空間から出てきた一本のナイフ。

「換装？」

「少し違うな。召喚だ」

言ったと同時に桃子の胸にナイフが突き刺さる！

「ぐはっ！」

刺されたというより噛まれたといったほうが正しい。
自分の肉を少しずつ食べられている！

「人食いナイフ。俺が得意とする召喚の一つだ」

やけに絶望的に聞こえた。

自分の六感を完全に支配されたのだ！

「この勝負俺の勝ちだな」

「ぎゃあー！！」

桃子の体は完全に消滅するのだった……

「……なんてな。俺は幻術も得意なんだよ。

それに人食いナイフなんか存在したらチームの掟破りで殺される
んだよ。

戻れ、まねまね！」

そして出てきたのは鉢巻に藍色の半纏を着た親父だった。
啞えキセルがこの召還のチャームポイントらしい。

「……翔、我はわしになんて変化させとんやねん！」

早速出てくるのは文句。

翔は少しでも悪びれた表情を浮かべ、

「仕方ないだろう。今回は相手が相手なんだ」

「関係ないわ！ もっと平凡は平凡らしい戦い方せんかい！
風を使っただけ使って人の六感を支配するなど、

「お前の親父さんの戦法じやろうが！」

「・・・お前、本当俺を主人として認めてるわけ？」

その言葉を残し、勝敗は決した。

勝者、片岡翔・・・

第三十三話：要注意人物

「夢乃が侵入しただけじゃないだと！」

ブラッドの一幹部が、下っ端の社員を怒鳴りつける！

「はい！ 夢乃達はおとり！」

本隊は篠原快のチームです！」

「あのガキどもか！」

最近噂になっている快達の活躍は、
ブラッドの幹部たちの中でも要注意人物となっていた。
そして、その一人は気配もなく後ろに現れたのである。

「そのとおりです、人生の先輩」

「なっ！」

その瞬間、ブラッドの一幹部の喉元にナイフが突きつけられる！

「こんばんは。掃除屋「TEAM」です。

幹部達の部屋に案内していただけますか？」

その声はあくまでも穏やか。

だが、さっきは本物だ！

さすがに情報を提供するしかなかったが、

「その必要はないぜ」

一発の銃弾が白真を狙ったと同時に、

一幹部の頭を打ち抜いた！

「……あぶないねえ。お仲間さん殺してどうするんだ？」

白真は軽々とそれを避けたが、

一幹部の命は途切れていた。

そして向けられた視線の先に、

黒いスーツを着た男が立っていた。

今回、ブラッドの幹部の中でも要注意人物とされていた男が……

「お前の立ち位置が悪い。

それに人質にとられるくらいなら死ねというのもうちの方針でな」

「TEAM」では考えられない方針。

しかし、取り乱すこともなく白真は答えた。

「なるほど、さすがは史上最悪組織だ」

そして白真は臨戦状態に入り始める。

「どうする？　ここから逃げ出した方がいいんじゃないか？」

「冗談だろ。こつちも命かけてきてるんだぜ？」

簡単に……」

白真の姿がその場から消え、

「引き下がるかよ！」

腰に刺していた刀を抜き斬りかかる！

「剣士か。何の能力も持たないタイプだな」

力はなかなかのものだが、

大の大人相手ではまだ白真の力は幼いもの。

すぐに敵わないと分かれば違う攻撃を考えるのもプロ。

白真は一定の距離を保つと、

「残念。俺達は「TEAM」だと言っただろう？」

手に青白い光が宿る。

そして現れた銀の刃に青い柄の剣。

「俺も快ちゃんと同じ隊長クラスの实力者だ。

ちゃんと勉強もしてるんだぜ？

換装士の海原探さんよ！」

白真はにやりと笑う。

「……そうか、ならば全力で戦うとしよう」

空間から大剣が現れたのだった。

第三十四話：召喚剣士

数分の睨み合いが続いた後、先に仕掛けたのは白真のほうだった。

「火遁！」

繰り出された魔法を防御用の大剣で海原は受ける。普通の使い手を使うものより大きい。

おそらく剣自体が大きな魔力を持っているのだろう。海原はそう考えた。

「炎タイプか」

冷静に相手の動きを見ることが出来る。

そうスピードの速いタイプでもない。

もちろん油断はできないが……

しかし、ここから予想は一気に覆される！

「それだけじゃない。氷柱！」

無数の氷の矢が繰り出される。

「氷タイプも使えるのか！」

「まだまだ！ 雷鳥！」

「くっ！ 今度は雷だと！」

戦いに繰り出してくる自然系のタイプが三つ。

しかもすべて性質を変化させるといふ芸当までやってのけて……

・
「お前何者だ？」

たずねられた問いに白真は丁寧に説明した。

「たいていのバスターは一人一つ的能力が普通。化物でも三つから五つだ。だが、俺の場合は違う」

繰り出されたのは無数の蛇！

「無限ナイフ！」

すばやい反応が自分の命を救った。
白真が繰り出したのは毒蛇！

「お前は召喚士か？」
「いや、少しだけ違うな。
俺はバスターの中でも極僅かしかないタイプ、「召喚剣士」だよ」

「召喚剣士」。それは自然魔法、魔物を召喚するバスターの中でも特質な存在だった。掃除屋世界の中では「無敵の能力」と謳われるほどのタイプなのである。

ただし、それを召喚するにはかなりの力が必要とし、さらには数少ない「召喚剣」の使い手でなくてはならないのである。

白真はまさに召喚剣に選ばれたバスターだった。

「お前の情報はすでにこっちに入ってる。
おとなしくここで負けを認めれば捕らえるだけで勘弁してやる。
うちは人殺しはしないんでね」

召喚剣士と戦うこと自体がほぼ敗者となる理由。
しかし、海原は冷静だった。

「・・・そうか。ならば先に謝っておこう。
全力でいくといいながら、舐めていたことを」
「ああ、あんた優しそうな性格してたし」

白真はにやりと笑う。

「そうか。だが、残念だ」
「うっ！」

突然白真の体に切傷が刻まれる！

「お前がいくら召喚剣士だろうと、
経験の差は埋めることはできない」

新たに白真の頬に切傷が走った・・・

第三十四話：召喚剣士（後書き）

今回はがんばってみましたよ（笑）

その理由はひとつ！

更新が来週一週間とまるからです（笑）

ですが、もう少し書きますんで、待っていてくださいね

第三十五話：痛いのは嫌

動けば動くだけ切傷は走る。

自分の体に絡まっているのは刃の糸。

そう簡単にこの状況を抜けさせてくれないのはさすがだ。だが、それでも白真は勝気な表情を崩さない。

どんな状況に陥っても、負けるわけにはいかないからだ。

「その顔は余裕から来るものなのか……
それとも虚勢か……」

海原は白真と向き合いながらそう呟く。

「さあね、だけどこれはずしてくれないか？
痛いのは好きじゃないんだ」

微笑を浮かべながら白真は頼むが、

「それは無理な話だ。
さっさとそいつで命を絶つのもいいだろう？
なんなら電流でも流してやるが」

バチバチと海原の手に電気が走り始める。
やはり換装士だけではなく、
魔法のいろはぐらいは一通り使えるようだ。

「それは痛そうだな。
さて、どうしたものか……」
「死ぬといいだろう」

そして電流が糸を伝い白真の体を直撃するその瞬間！

「今だ！」

白真は体から莫大な熱を発生させた！

電熱が加わった糸は一瞬のうちに消滅する！

「なにっ！」

「油断すんな！」

召喚剣が海原の胸を斬りつける！

「ぐっ！ この！」

空間から再び大剣が飛び出し、

澄んだ金属音が響き渡った！

「くっ！ 力で敵うと思ってるのか！」

「いや、思っていないよ。」

「だけど剣道は力だけじゃないだろ？」

白真はすつと力を抜き、

大剣の刃に自分の刃を滑らせる。

「なっ！」

海原の体のバランスが崩れたと同時に、

白真は一回転して斬りつけた！

「ぐはっ！」

「召喚・大蛇の縄！」

海原の体が蛇に絡まれる！

「うっっ！！」

ミシミシという骨の音。

そして白真は殺気を含んだ目をして海原を見下ろした。

「この勝負、俺の勝ち」

それだけいうと、海原は意識を失ったのである……

第三十六話：デビル・アイ

全てはこのときのためだった。

どうしても勝ちたかった。

どうしてもけじめを付けたかった。

自分の性でその年、夢乃に宿っていた弟の命はなくなった。

そのときに悲しんだのは夢乃だけじゃなかった。

翡翠も幼いながらに泣いていた・・・

「ようやく出会えた。氷堂尊氏」

ブラッド社長室。

暗室の中に少しだけの明かり。

だが、尊氏の周りは恐るべき覇気が取り巻いている。

そして専用の黒革の椅子に、尊氏は座っていたのだ。

「篠原快か。ずいぶん成長したようだ。

噂でも聞いたよ、天才バスターだとな」

声は変わっていない。

だが、どこか異様な空気になった気がするが、

さすがの快の視力でも確認できなかった。

しかし、冷静さは失わずに言葉を返す。

「噂だけか？ 相手の力量を測れないほど落ちぶれてるわけでもないだろう？」

少しだけ快は自分の覇気を叩きつける。

それに尊氏は微笑を浮かべた。

「ふふっ、その通りだな。」

だが、少しは懐かしむ時間を与えてくれないか？

容姿だけは義臣にそっくりになってきたんだからな」

尊氏には自分の姿が見えていた。

少々明かりがなければ自分に不利なようだ。

「容姿だけだと思ふなよ」

そついった次の瞬間、

快は天井を破壊する！

「破壊力も上がってるんだからよ！」

ブラッド本社を燃やしていた火が暗室に差し込んだ。

だが、快が見たものはかつての尊氏の顔ではなかった。

「それは……！」

左目に入った赤い機械の目。

傷口はそのままだが、

目そのものに生命を感じる。

「昔言ったことがあるだろう？」

風野博士が作り上げた『デビル・アイ』だ」

それはかつて快達に持つてくるように命じたもの。
それをこの八年間で尊氏は手にしていたのである。

「私の目になじむのに時間がかかったが、
今では最高の気分だ。」

これで義臣に復讐できる」

「ぐはっ！！」

快は吐血した！

デビル・アイから発生した衝撃波の直撃を受けていたのだ！

「だが、その前にお前からだ、篠原快」

第三十六話：デビル・アイ（後書き）

これで一応少しの間更新停滞です。

その間に今までの話を読み返してくださいと嬉しいです

そして、もうすぐこのお話も完結です。

ですが・・・・・・また今度にします（笑）

さらに、この話の疑問とかあったらどしどしお寄せください

（ただでさえわけのわからん話ですしね）

お待ちしております

第三十七話：意外な策略

「快、こいつを見てみる」

義臣は快に一冊の資料を差し出した。

「デビル・アイ・・・」

分厚い資料にはデビル・アイの構造と性能が記されていた。

「ああ、聞いたことはあるだろう?」

「そりゃあるけどよ、こんな手の込んだやつ壊すのは厄介過ぎるだろう」

快の意見は最もだった。

近づけば衝撃波が来る、視力は人の倍、

そして何より人体の強化・・・

並のバスターが相手に出来る代物ではない。

「だが、氷堂はこいつを手に入れた」

「なっ・・・!!」

快は声が出なかった。

よりによって氷堂はデビル・アイを手に入れているのだという。
勝ち目があるはずがない。

「だが、デビル・アイも機械だ。

必ず弱点は存在する。

その図面から全ての機能と応用、そしてその隙を弾き出せ。

もちろんそいつプラス氷堂の戦力も考えろ」

「・・・人の努力を数時間で記憶しろってか・・・」

「昔、俺の書斎からデビル・アイの記録持ち出した奴がいたよな」

義臣はニヤリと笑った。

確かに、八年前のあの事件から、いつかデビル・アイと対峙する未来を予測はしていた。

しかし、現実はどううまくいくものではない。

完璧なものは世の中に存在するものだ。

快の頭脳を持ってしても、破壊までのシナリオが組み立てられない。

「父さん、父さんならどうやって戦う？」

初めてまともな質問をした気がする。

「そうだな、俺なら・・・」

「その程度の衝撃波も避けられないとはまだまだか。義臣とは」

「違うに決まってるだろ！」

その声は氷堂の足元からしたものの。

そしてその足元から快は飛び出して来た！

「なっ！」

コンクリートの床から飛び出してくるなど、馬鹿げた戦いとは思えない。

しかし、それを平然としてやった奴がいる。

「義臣の入れ知恵か」

「ああ。慣れたくねえなこの戦法」

快は笑った。

義臣の呆れた考えが的中したのだ。

「俺なら騙し討ちする」

「はあ!？」

ありえない。そう簡単に出来るはずがないだろう。
しかし、義臣は続けた。

「一言で言えば難しいな。
だが考える。あの倉庫の中で出来る有り得ない攻撃パターンを」

「そういうことだ。続けるぜ!」

快は微笑を浮かべた。

第三十七話：意外な策略（後書き）

久しぶりの更新です

どうぞお楽しみください。

第三十八話：ゲーム

風が倉庫の中に吹いてくる。

自分達がTEAM本社を出発して少なくとも六時間は経っている。朝日が昇り始めたのか、

闇の中にも光が差し込み始めた。

「騙し討ちか。義臣の考えそんなことだ。だが、お前にこれ以上の時間はやらん」

そして現れた七人の氷堂尊氏。個々の力が高いが、快が倒せないレベルでもない。

「一斉攻撃でも仕掛けてくるのか？」
「いや、これはゲームだ」

音も立てず、分身は一斉に散っていった。

「デビル・アイを搭載した分身の俺とまともに戦えるのは夢乃のみだ。」

だが、さすがの夢乃でも全員を救えるかどうか・・・」

その瞬間快は突っ込んでいく！ 時間がない！

「喋ってる暇はない。すぐに片付けてやる！」
「出来るものなら」

そして二つの力は激突する！

「召喚！ 雷神！」

「消してやる」

赤い目が不気味な光を放つ。

だが、快の得意とする召喚は尊氏のデビル・アイと対等だった。

「舐めんな！ 雷神放て！」

雷神の持つ銚が高電圧をおび尊氏に襲い掛かる。
しかし、デビル・アイはその電圧を掻き消した！

「効くわけがない」

「これもか？」

「・・・！！ 下か！」

コンクリートの床から雷柱が二本出現する。
また騙し討ちだ。

「煩わしい！ 消えろ！」

デビル・アイが再度不気味な光を放つ。
それは雷神そのものをこの空間から消滅させた。

「次はお前をこの空間から消す」

「・・・そのからくりは回避できる」

「はったりを！」

デビル・アイが快をこの空間から消そうとしたが、
攻撃そのものが快の前で弾けた！

「何っ！！」

その隙が絶好のチャンスだった。
快はデビル・アイにナイフを突き刺す！

「うがあっ！！」

目を押さえ氷堂はよろめく！
その瞬間が最悪の事実を物語っていた。

「ダミーか！」

「その通りだ」

倉庫は爆発した。

第三十八話：ゲーム（後書き）

またまた更新遅くなりました。
できるだけがんばりますので、応援よろしく願います

第三十九話：一人目

「夢乃！ そっちの状況を知らせろ！」

義臣は先発隊の連絡が突如途絶えた事で臨戦体制を敷始めた。
社員たちが招集をかけ始めている。

「……至急援軍を！」

尊氏の分身全てにデビル・アイのコピーが搭載されている！」

「コピーだと！？ そんな馬鹿な事があるはずがない！」

「それが実際に起きてる！」

このままじゃ快のチームが全滅する！ 至急援軍を！」

そのとき背中に悪寒が走った！

氷堂尊氏だ！

「自分の息子を心配している場合か？」

振り返った瞬間、刃が夢乃に振り下ろされた！

「夢乃！」

夢乃の通信は完全に途絶えた……

「何やってるんだよ快ちゃん……」

「さあな。だが、氷堂が分身が得意戦術だって事は知ってただろう」

「そりゃデータは頭の中に入れて来たけど、

こんな不気味だなんて聞いてないよ」

修と白真は合流していた。

おそらく自分たちの目の前にいるのは氷堂尊氏の分身のみなら倒せたかもしれないが、

デビル・アイを搭載した相手と戦って無事だとは思えない。夢乃達がこないのも、戦闘に巻き込まれたからだろう。

「とにかく翔が一人なんだ。

こいつを早く倒して合流するぞ」

「しかないね」

二人は立ち向かった。

そして、噂の主は絶体絶命のピンチを迎えていたのである。

「弱い……。お前が片岡航生の息子とは思えないが……」

「あんな化物と一緒にするな……」

翔は肋骨の痛みに耐えながら答えた。

数本折れていることはわかる。

しかし、死ぬわけにもいかない。

「まあいいだろう。お前もかつてはブラッドに潜伏していたんだ。

私自ら消してやることを光栄に思おうがいい……」

「へっ……。！ 分身なら俺でも勝てたかな……」

デビル・アイは不気味な光を放ち、翔の胸を貫いた……

「一人目だ、篠原快……」

氷堂はその場から消え去った。

第四十話：龍神

「社長！ 私たちをブラッドに援軍としていかせてください！」

紫織は翡翠と大地を連れて社長室に入って来たが、

「駄目だ。尊氏のレベルが夢乃以上に値する状況で出撃することは許可できない」

「だけどこのままじゃ！」

「義臣、わしが出る。そのガキどもを連れての」

そこには意外な人物が立っていた。

「翔！ しつかりしろ！」

「か・・・！」

息はあった。

しかしギリギリの状態だ。

夢乃が近くにいることは間違いないが、
戦闘中だということは魔力でわかる。

「待つてろよ、すぐに援軍を！」

そして遮れた希望。

そこには二人の尊氏の影。

智子と氷堂仁のもとにいたやつらだ。

「夢乃のチームといえども、私の影にまだ勝てんとは・・・」

二体がじりじりと詰め寄ってくる。

一体相手に騙し討ちで精一杯だというのに、さらにまだオリジナルに会えないというのに！

「翔、お前の命俺に賭けるよ！」

快は強力な結界を張る。

そして自分の力を解放する。

しかし、さつきとは少しだけ違った。

「力が変わったな。何をする気だ？」

「一瞬だ。親父から絶対使うなといわれていたが、そういうわけにもいかなかった。

召喚の中でも雷神を越える奴だ。

かつて親父と戦ったことがあるならわかるだろう？」

さすがの尊氏にも余裕がきえた。

雷神を越える義臣の十八番。

それも息子が使うなら間違いない！

「ドラゴンか……」

「龍神だよ！」

暴風が快の周りを取り巻き始める！

その異常な力はコンクリートの壁に亀裂をいれ始める。

そして青い目をした快は理性をギリギリ保ち尊氏と対峙した。

「オリジナルを引きずり出す！

召喚！ 神龍！」

まばゆい光が空間をすべて切り裂く！
そして現れた一体の龍。

「掻き消す！」

快は不敵に笑った。

第四十話：龍神（後書き）

またしばらく書けなくりますが、待っててくださいね。

第四十一話：スピード

人生に一度はピンチに出遭うものだ。

それが今、目の前で起こってはいるのだが、片岡翔の意識は戻らなかった。

「神龍の召喚・・・確かに義臣の十八番ではあるが、使うものがまだまだ未熟と見える。

威力は義臣の半分しかないか・・・いや、三分の一だな」

術者によって召喚のレベルはもちろん違う。

義臣のレベルで尊氏と渡り合えるなら、

当然自分の力はまだ足りないだろうと快は認めている。

しかし、それが分かっている義臣は自分に氷堂尊氏討伐を命じたのだ。

169

「死ぬことが確実な命令を親父はしない。

それをあんたは一番知っているんじゃないか？」

その瞬間、一陣の風が二体の分身を消滅させた。

それに気付いたオリジナルは、

空間を縫って姿を見せる。

その表情に余裕がない。

「・・・今のは」

「親父に威力は届かない。

もちろん神龍を長く出してもいられない。

だが、操るスピードは劣りはしない！」

さらにスピードは速くなる！

そのスピードは義臣の操る神龍と互角に思わせた。スピード一つが大きな威圧感をもたらす。

「ふざけるな！ 空圧の檻！」

巨大な空気の檻が神龍の動きを奪おうとするが、神の力を司る龍にそんなものは無駄だった。

「くたばれ！ 氷堂尊氏！」

尊氏は神龍が放つ神々しい光に吞まれ、またそれと同時に快も意識を手放した。

しかし、戦いは終結してなかったのである……

第四十二話：色鳥透士

「オリジナルが消えたようだな」

「うん、快ちゃんが倒したんだね」

満身創痍となりながらも、修と白真は生きていた。
いきなり尊氏の影が消えたということは、
彼が敗北したということだ。

「おそらくこれだけの被害だ。」

翡翠達が来るな」

「ああ、来てくれないとまずいかも・・・」

そして二人は意識を手放した・・・

しかし、この話には続きがある。

「ありがとう、中村君。助かったわ」

夢乃は部下の中村に礼を言う。

夢乃が斬り付けられそうになった瞬間、
間一髪で助けられたのである。

「チームメイトを助けることは当然だからな」

突然変わった口調と声は彼女の部下ではない。
そして現れた顔に夢乃は驚いた！

「嘘……！ 戻って来てたの！」

「ああ、今回の依頼者は俺だからな」

白真が大人びた顔。

その正体はこの任務の依頼者であつた色鳥透士だった。

「氷堂は快が倒したようだが、

デビル・アイが消滅していない。

あれは医学の面から見れば最悪な代物だからな。
完全に消しておきたいんだが……」

透士の言葉が止まった。

そして表情を崩すこともなく、

まがまがしい光景を目にしたのである。

「……快のやつもつめが甘いな。

氷堂を完全には倒せなかったか」

二人の目の前に現れたのは、デビル・アイに支配された氷堂尊氏だった。

デビル・アイは顔の血管に根を張り、

不気味な赤黒い光を放っていた。

もはや、人間ではなかった。

「氷堂……」

「やはり飲み込まれたか。

制御出来ない代物に手を出した代償ではあるが、
このままにしておくわけにもいかないからな」

透士は召喚剣を抜くと夢乃に笑みを向け、

「また当分帰れそうにない。

白真が怒るだろうが、あいつの面倒よろしく頼むよ」
「透士ちゃん！」

まばゆい光が空間を貫く！

任務は終わったのである・・・

第四十二話：色鳥透土（後書き）

お待たせしました！ ようやく更新できてうれしいかぎりです
いよいよお話も終わりを迎えます。ですが、第二弾も書きますので、
楽しみにしていってください

第四十三話：任務完了

朝日が眩しいと感じたのは何年ぶりだろう。
随分長い時間眠っていたのは確かで、
八年前と同じ光景が目の前にあった。

「父さん……」

「おつかれさん。任務は一応成功したようだな」

義臣は口元に笑みを浮かべた。

それだけが八年前と違っていたことだった。

「全員無事か？」

快は尋ねると、義臣は首を横に振った。

「修と白真が重傷、翔はまだ夢乃さんが付きつきりだ。

快、龍神の使い方がまだなっちやいなかったようだな。
仲間の傷を開くような力をそう簡単に使っなよ」

快は唇を噛んだ。

結果は全員生きてはいても、

仲間を危険な状況に追い込んでいたのである。

それだけは許されることではない。

「だが、お前が氷堂の本体を引っ張り出さなかったら、
まだ被害はでかいものになっていた。

確かに仲間を傷つけたが、
隊長としては合格点をやる」

そして義臣は立ち上がると、

「早く体治せよ。一番の重傷はお前だったからな。

それともう一つ。デビル・アイは透土がケリを付けた。

翡翠に安心できる言葉でもかけてやれ」

「……父さんがかけてやれよ」

確かにそっちの方が効果的だとは思うが、

義臣はからかうような笑みを浮かべて答えた。

「お前の傷は全部翡翠が治したんだ。

それだけお前のことを思ってるなら、

お前が今回のことをすべて話せ。

ついでに嫁に来てくれても構わないというところまで話を進めて」

「ふざけんな!!」

叫んだ代償はすぐに跳ね返って来た。

それを笑いながら義臣は言ってる。

「そういうことだ。

風野博士のことから翡翠を解放してやってくれよ。

これは命令だからな」

そして義臣は快の部屋を後にしたのである。

第四十四話：鼓動

快の部屋に行くのにこれほど気が重かったことはない。

どんなに大きな喧嘩をしても、

自分が悪いと思えば謝りにいつていた。

だが、自分達が現場に着いたときには、
すでに戦いは終わり、快は重傷だった。

自分の父親が造ったものが、

大好きな人を傷つけたのだから・・・

「翡翠、そこにいるなら入ってこい」

快の部屋から声が聞こえる。

いつもなら遠慮なしに入るが、

今日は会う勇気がない・・・

「快・・・私は・・・」

謝っても許されることではない。

分かっている分だけ辛い。

言葉は続かなかった。

「翡翠、お前は治療兵だろ。

隊長命令は絶対だ。入れ」

そしてそつと翡翠は快の部屋に入った。

ただ、顔は上げられない。

「快・・・」

翡翠は泣き始めた。
それに快は慌て始める。

「おい、泣くな！ お前を泣かせたりしたら殺される！」

快は本気でそう言った。

この

「TEAM」の暗黙の掟は、

「女子を泣かす可からず」

「泣かせたものは死刑」である。

「快！ 本当にごめんなさい！

お父さんがあんなもの造るから皆を傷つけて……！」

ついに翡翠は泣き崩れた。

ずっと思っていたことだろう。

たとえ風野博士が兵器としてデビル・アイを造るつもりじゃなかったとしても、

結果は結果だ。

多くの怪我人を出してしまったのだから……

「翡翠、本当泣くな。

誰の性でもないんだよ。

お前が責任を感じることもないんだ」
「だけど皆が！」

次の瞬間、快は翡翠を抱きしめた。

それはさらに翡翠の涙を流させることになったが、
多くの言葉はいらなかった。

ただ、快は一言呟いた。

「大丈夫だ。大丈夫だからな」

二つの鼓動が少しだけ近づいていた・・・

第四十五話：チームで良かった

「で、結局また告れなかったのか」

「またと言っな」

テスト終了後の部活は少しばかり体が重い。
しかし、それも無理はない。

任務完了から丸四日間、

快チームの四人は絶対安静を命じられた。
その代償としてテストも一日遅れたので、
放課後までテストを受ける羽目になったのだ。
そしてさらに快の心は悪友の一言に、
気を重くしているのである。

「まっ、快が不器用なのは知ってたけどよ、
いい加減翡翠に伝えること伝えねえと逃げられるぞ？」

まるで刃を喉に刺されそうな気がした。
翔のいうことはたいてい的を得ている。

「それによ、お前があいつの隣にいてやらねえと、
しつくり来ないのは俺だけか？」

それだけ言えば十分だった。
翡翠が隣にいなければ、
何かが欠けてるような気がするから。

「かもな。とりあえず、聞くだけ聞いてみるか。」

「フラれようとも同じチームなんだからさ」
「はっ!？」

思わず翔は声をあげた。

フラれるなんて言葉が、

快に存在しているなどと誰が思うだろうか。

「お前、んなこと思ってたのか？」

「当然だろう？」

あいつが俺を恋愛対象に見てると確定できるか？」

ここに他のチームメイト達がいたら、
どれだけ大騒ぎになっていただろう。

快が翡翠のことに鈍くなるのは知っていたが、
ここまでじれったいと、

蹴りの一発を入れても罰はあたりそうにない。

「とにかく、翡翠に言ってくる」
「何を？」

突如現れた当事者。

驚いたのは快だけではない。

「とりあえず、俺は先にあがるから」

精一杯の翔なりの気遣い。

しかし、それは一瞬のうちに消えた。

「翡翠、お前・・・肩の包帯緩いんだよ！
ちゃんと巻いとけ！」

さっきまで告白するといった決意は、
一体どこに消えたのか……
もはや空気は恋愛と程遠くなった。

「なっ！ 快が沢山動くからじゃない！
あゝっ！！ こんなになっちゃって！
また傷口開いたらどうするのよ！
それをさせないのがお前の仕事だろ！
ちゃんとしとけよ！」

そして翔は思った。

「こいつらがチームで良かったよ……」

特大の溜息は彼の心情を全て物語っていた……

第四十五話：チームで良かった（後書き）

THE TEAM！（2）も始まりました是非ご覧ください。

次回予告

ついに

「THE TEAM!」の謎が、

次々と説き明かされていく!!

そして、TEAMに多くの激震が走る!!

これが次回、第二部の予告編だ!

「御存じじゃないんですか?

私たちは影です」

美少女がそう呟いた。

それを聞いて男の顔は青ざめる。

「影だと……!」

まさかあの

「TEAM」の特殊部隊か!」

「大変よ! 快君が知らない女の子と歩いていた!」

「なっ……!!」

カレカノ同盟全員が言葉を失った。

そして噂の主は、いつも通り教室に入ってきた。

「快ちゃん! あいつが帰ってくる!」

白真は嬉しさ全開だ。

しかし、それとは対称的な態度を快はとる。

「あいつ？ あいつじゃ分かん。

一体誰のことを指してるんだ？」

「快に全てを話してあげなくちゃだめなの？」

「いつかはたどり着く真実だ。

それにあいつはわかってくれるからな」

義臣は夢乃の手に自分の手を重ねた。

しかし、それでも夢乃は不安だった。

今まで築き上げて来た平和が、

一瞬のうちに消える気がしたからだ。

「まさかお前が裏切るなんて思わなかった」

修は冷たい目を向けた。

それは初めて仲間に向けられたものだった。

「覚悟しろよ。俺は仲間でも、

裏切りを許すお人よしじゃないんだ」

修は本気だった。

そしてついに……！

「翡翠、俺は・・・！」

快は少しずつ翡翠に近づいていく。

次回を待て・・・！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3035d/>

THE TEAM！

2010年10月14日01時37分発行